

神戸大学 国際人間科学部同窓会

紫陽会

神戸大学 国際人間科学部同窓会 紫陽会 富打 文知果 固有口 富打 国際性 開放的 大学

2021.12.10 vol.2

発行

神戸大学 国際人間科学部同窓会紫陽会 会長 青木荘一郎
〒650-0011 神戸市中央区下山手通6-2-19

電話：078-371-6322 FAX：078-371-6306 郵便振替：01140-0-84600
Email：kobe-ajisai@shiyohkai.com URL：https://shiyohkai.com/

印刷

交友印刷株式会社
電話：078-303-0088 (代)

表紙、題字 書家 和田 彩



使 命

和 田 彩

神戸大学の「使命」を大筆と墨で書いた。この全文は、「神戸大学は、開放的で国際性に富む固有の文化の下、『真摯・自由・協同』の精神を発揮し、人類社会に貢献するため、普遍的価値を有する『知』を創造するとともに、人間性豊かな指導的人材を育成します」である。

海と山に囲まれた神戸大学。眺望と自然環境に恵まれたキャンパスに和田彩が筆を揮った。私の書道芸術をここから世界に発信する。世界中の人々に神戸大学の良さを知ってもらいたい。

プロフィール

和田 彩 AYA WADA

わだ・あや 書家／筆跡鑑定士／学術博士

兵庫県神戸市生まれ

1991年 神戸大学教育学部卒業

1993年 神戸大学大学院 学校教育研究科修了

2010年 神戸大学大学院総合人間科学研究科博士課程後期課程修了 博士号取得

神戸芸術文化会議会員、兵庫県書作家協会理事、飛雲会理事、六彩舎主宰

〔主な受賞歴〕

1994年 兵庫県書道展 神戸市長賞

2005年 毎日書道展 毎日賞

2018年 神戸市文化奨励賞

2020年 紫陽会賞

2021年 芸術文化団体「半どんの会」文化賞



和田彩／六彩舎QR

目次

表紙に寄せて・作者紹介	2
ごあいさつ	4
神戸大学 国際人間科学部同窓会紫陽会 会長 青木 荘一郎	
神戸大学 学長 藤澤 正人	
神戸大学 国際人間科学部 学部長 青木 茂樹	
神戸大学 国際人間科学部 前学部長 櫻井 徹	
神戸大学 国際人間科学部 事務部長 春名 正基	
【特集】国際人間科学部の今	
学科紹介	9
○グローバル文化学科 大森 忠矢	○発達コミュニティ学科 柳楽 直人
○環境共生学科 原田 拓明	○子ども教育学科 米崎 亮佑
GSP体験記2020	12
平出 将悟・大森 忠矢・原田 拓明	
国際人間科学部の“つながり”	14
(2020年度学位記授与式)	津阪 菜名・加藤 優汰
【紫陽会賞】	
第15回ホームカミングデイについて	16
第11回紫陽会賞受賞者紹介	16
第10回紫陽会賞受賞者メッセージ	17
故郷(淡河)の歴史に想う	戸田 紘
出会いの中で	和田 彩
【教育実習事前実習を終えて】	19
講座「生徒指導」今年は50分の動画で…	栗木 剛
講座「家庭との連携」言葉の向こうに響くもの	板東 克則
【支部だより】	21
〔東京〕東京六甲クラブ50周年記念合同演奏会	鈴木香代子
〔大阪〕コロナ禍における大阪市の教育と大阪支部の現状	清岡 延吉
〔姫路〕感染症対策に翻弄されながら走り続ける学校現場より	梶原潤一郎
【会員だより】	24
ゆく河の流れは絶えずして	尾崎 文明
アメリカと日本の中で	飯島 千尋
文理融合、資料デジタル化の潮流のなかの歴史学研究－「紙」から	徐 小潔
一人ひとりの生き様を見つめて－歴史研究での学びと介護の現場－	山本かえ子
神大発の「笑い」を六甲祭に	山本 望
新しい時代へ	脇 善昭
義務教育学校港島学園での5年間	柳田 竜一
教員の働き方を見直して…	西山 令
先輩からのメッセージ	小杉 美和・三宅洸太郎
【事務局から】	
2021年度 評議員会報告・資料	37
2020年度事業報告・2021年度事業計画案	
基本財産・運用財産 2020年度決算報告・2021年度予算案	
2021年度 評議員一覧	
事務局だより	40
第13回学部支援基金委員会報告	
会員の皆様のご協力・ご支援を	
お悔やみ申しあげます	
会員寄贈図書一覧	
あじさいの小径(編集後記)	



新たな力に期待して

紫陽会 会長 青木 荘一郎

昨年度より続くコロナウイルス禍は現在も収束の兆しは見えず、感染対策のため制約の多い日々が続いています。その中で、健康被害をはじめ様々な厳しい状況におかれている皆様にあらためてお見舞い申し上げます。

大学においても1年以上対面での講義等が実施できない状況が続いているとお聞きしています。その間、大学関係者の皆様がオンラインでの講義など、様々な工夫を重ね、学生たちの学修活動の保障に取り組まれていることに、あらためて敬意を表します。

とりわけ国際人間科学部においてはGSP（グローバル・スタディーズ・プログラム）の海外での活動ができない状況であり、それを克服するための先生方のご苦労は並大抵のものではなかったかと拝察いたします。例年とは異なるGSPの活動の一端は「GSP体験記」として本会誌にも掲載していますのでご覧ください。

紫陽会の活動についても、昨年度に引き続いて対面による活動を中止せざるを得ませんでした。評議員会で審議いただく事柄については書面評決手続きによって対応させていただきました。

3月に実施していた卒業祝賀のための事業は、今年度も祝品としてクオカードを贈ることで、紫陽会からのお祝いの気持ちを伝えました。その中、大学当局と学生実行委員の尽力でポートアイランドホテルで、学位記授与式が開催できたことは、数少ない明るい話題です。

その他、本会の事業としては4月には例年紫陽会が教師を目指す後輩たちのために講師をしていまし

た教育実習事前講義（8講座）が今年はすべてオンデマンド方式で行われました。例年とは異なる形の講義に対応していただいた講師の皆様にあらためてお礼申し上げます。参加学生の感想の一部を読ませていただきましたが、講師の思いを受講生がしっかり受け止めており、後輩たちの頑張りを感じました。

今号は現役学生や若い世代からの記事・投稿を多く掲載しました。コロナ禍の中の大学の現状を伝える内容、学校現場の様子、国際的な多様な場所で活躍する会員の様子など、幅広く掲載をしています。国際人間科学部になり会員の活躍の場はさらに広がっています。

紫陽会賞についても、今年度は準会員（在学生・院生）の部の3名の方に授与させていただきました。コロナ禍の苦しい状況の中で研究に励まれている院生、研究者など若い世代の励ましになればと思います。コロナ禍の中、ともすれば下を向きがちな日々ですが、今こそ若い力に期待したいと思います。

最後になりましたが、大学においては今年度藤澤正人新学長が就任され、コロナ禍の苦難の中ではありますが「世界トップレベルの大学」を目指して力強く船出をされました。紫陽会も大学との連携を強化しつつ、現役生の支援を続けていきたいと思えます。今後ともご協力よろしくお願いいたします。



学長就任にあたって ～知と人材を創る異分野共創研究教育グローバル拠点をめざして～

神戸大学 学長 藤澤 正人

紫陽会の皆さま、4月から第15代神戸大学学長を拜命することとなりました藤澤正人でございます。医学部出身としては、3人目ですが、神戸大学医学部卒業生としては、はじめて学長に就任させていただくことになりました。専門分野は、腎泌尿器科学、臨床医として約40年間診療しながら研究、教育を行い、その間に附属病院長、医学研究科長を務め、この度学長となりました。

今、日本は、コロナウイルス感染によって経済の低迷、医療の逼迫という大きな問題を抱え、社会の動きは不透明な状況が続いていますが、大学においても教員、学生、事務職員の教育研究活動において大きな影響を受けています。特に、学生教育への対応には多大なる配慮を要し、国際共同事業においても留学生をはじめ多くの研究者の国際交流が難しく、著しい支障をきたしています。とくに、国際人間科学部の特徴である全員に留学をさせるGlobal Studies Programの運営においては、大変なご苦勞をされていることかと存じます。すでに職域において希望される学生、教職員の方へのワクチン接種が行われていますが、変異株の感染流行により収束のめどはたっていません。少しでも早く、大学における通常の教育研究活動を取り戻し、活発化させることができる日が来ることを期待しながら、先を見据えて学長として強いリーダーシップを発揮していかなければなりません。

神戸大学は、10学部15研究科を有し、恵まれた環境のなかで約16,000人の学生が学ぶ総合大学であり、自然科学・医学生命系と人文・人間・社会学系がバランスよく共生して教育研究活動を進めています。大学の使命は、知的活動や創造力によって真理を探究する基礎科学研究、あるいは、地域社会と共に創る応用科学研究の協働によりイノベーション

を創出するとともに、卓越した教育により人材を育成し、社会に貢献していくことと考えています。また、今回のコロナ感染の中で大学として浮かび上がった様々な課題にしっかり対応し、コロナ禍ゆえに得られた知とこれまで培ってきた実績を活かし、教育研究活動を活性化していくことも重要です。社会の価値軸が、多元化、複雑化、流動化していくなか、次世代を見据え危機意識を絶えず持ち、社会への透明性の確保と説明責任をしっかりと果たしながら神戸大学の教育研究機能の発展に向けて継承と改革を念頭に運営を行って参りたいと思います。

来年度から第4期中期目標・計画期間（令和4年～）が始まります。より一層の機能強化とSociety 5.0の実現に向けて加速している知識集約型社会への動きを視野に入れ、その社会的ニーズに応えられるよう教育研究、経営改革に取り組んでいかなければなりません。現在、第4期の大学運営費交付金配分について議論が重ねられていますが、より大学改革の成果を重視されるような配分になると思われます。神戸大学としても大学間競争が激しくなる中で、大学間の連携も視野に入れながら神戸大学の強みをさらに活かして研究教育、経営体制の強化に取り組むとともに国内外から世界トップレベルの教育研究者を糾合し、その質のさらなる向上と機能拡充を図り、優秀な人材を育成できる、国際的な卓越研究教育拠点を目指して参りたいと思います。

最後に、神戸大学は、2022年創立120周年を迎えます。紫陽会の皆様方には、引き続き神戸大学の発展に向けて高所大所からご指導・ご鞭撻ならびにご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。



コロナ禍の試練をくぐる

神戸大学 国際人間科学部 学部長 青木 茂樹

一昨年から発達科学部長・人間発達環境学研究科長としてお世話になっておりましたが、今年度、国際人間科学部長を拝命いたしました。よろしくお願いいいたします。

国際人間科学部は、新しい時代・世界の要請に応えるべく国際文化学部と発達科学部を再編統合して設置されました。両学部は、旧制姫路高等学校および兵庫県下の師範学校の歴史・伝統を引き継ぐ神戸大学教養部および教育学部を母体として設置され、四半世紀にわたりそれぞれ「異文化理解」および「人間発達」をキーワードとする学際系学部として人材を輩出して来ました。

21世紀に入り、情報通信技術の進化や交通手段の発達にさらに加速しグローバル化が急速に進む世界の中で、さまざまな地球的課題（グローバル・イシュー）が発生し深刻化しています。利害が対立したり複雑に絡み合う問題も数多く、一面的で単純な理解・分析での解決は難しく、複眼的学際的視座と柔軟な姿勢で取り組むことのできる人間が求められています。国際人間科学部は、国際文化学部・発達科学部の時代から培ってきた「深い人間理解と他者への共感」を新たなキーワードとして、多様な人々が共存するグローバル共生社会の実現にむけて貢献する協働型グローバル人材を育成することを目的としています。

2017年に迎え入れた第1期生が4年生となる昨年の春に新型コロナウイルスの流行が始まる事態となってしまう、授業を遠隔・オンラインで行い、感染の拡大防止に最大限の注意を払いつつ卒業研究を進めることで、何とか進級・卒業を遅滞させない努力を続けております。その際に、神戸大学基金にてご協力をお願いしました「新型コロナウイルス感染症対策緊急募金」に対しましては、多数の卒業生の方々からご厚志をお寄せいただきました。この場を

お借りして心から御礼申し上げます。

国際人間科学部では、グローバルイシューを実感し・考察するための海外研修とフィールド学修に取り組むグローバル・スタディーズ・プログラム（GSP）を学科横断の必修科目としていますが、新型コロナにより留学期間の途中で帰国しなければならない事態も発生しました。そのような状況下でも、学生のGSP履修を支援するGSPオフィスでは、教員からの提案を試行する形で始まったオンライン海外研修や国内のフィールド研修でも海外研修の代替要素のあるものを実施することで、限られた条件下で最大限の学修成果が得られるよう工夫・努力を続けています。

新型コロナ2年目となる今年度は、学生がキャンパスに来られないことにより彼らが被るデメリットを深刻にとらえ、感染予防策を徹底しながら対面授業を基本とするという方針をかかげて4月から新学期をスタートしたのですが、変異株による第4波にみまわれ若年層でも感染・重症化のリスクが低いことから、たった1週間で遠隔授業中心の態勢に逆戻りすることとなってしまいました。夏休み中はデルタ株による第5波が猛威をふるっていましたが、そうした中でも、ワクチンの職域接種を進めることができ、後期の授業からは、遠隔授業を併用しつつも、十分な感染防止措置を講じた上で、対応が可能な範囲で対面による授業を再開し始めています。

大学の正課の部分の回復はもちろん進めるのですが、若者にさまざまな人や物と出会う機会を提供するという大学の果たしてきた重要な役割についても、学生諸君と教職員とが協力しながら少しずつでも取り戻して行きたいと思っています。

卒業生の皆さまには、今後もさまざまな形でのご協力を仰ぐ機会も出て来るかとは思いますが、今後ともよろしくお願いいいたします。



国際人間科学部長の任期を終えて

神戸大学 国際人間科学部 前学部長 櫻井 徹

長引く新型コロナウイルス感染症の流行の中、紫陽会会員の皆様におかれましては、いかがお過ごしでしょうか。私は岡田章宏初代学部長のあとを継いで2019年4月に国際人間科学部長に就き、岡田修一副学部長と二人三脚で国際人間科学部の初めての卒業生を送り出すと同時に、2021年3月、学部長を退任いたしました。

今のご時世ではどなたにとっても同様かと思いますが、“無事に”任期を終えましたとはとても言えません。任期最後の1年余りはまさしくコロナ対応に追われた日々でした。まず、遠隔授業の全面的導入がありました。昨春には、全学を上げて急ピッチで遠隔授業の準備が進み、前期授業は例年より1カ月遅れの5月の連休明けから、通常の90分ではなく105分授業で遠隔授業を実施するという異例尽くめでした。

2年前、私が本誌に学部長就任のご挨拶を寄稿させていただいた際に、自分の主な任務は2つありますと申しあげました。すなわち、GSPをより実り多いものにするのと、同窓会の統合の完成のお手伝いをする事でした。

第1の任務は、残念ながら新型コロナウイルスの流行のため、かなりの打撃を被りました。パンデミックの勃発のために、本学部の必修科目GSP(グローバル・スタディーズ・プログラム)の海外研修に出発したものの予定を早めて研修先から帰国せざるをえなかった学生、そして海外研修が催行中止になり出国さえできなかった学生たちは、合わせて200人に上ります。その後、今日に至るまで、海外に実際に渡航する研修はまったく実施できていないことを考えますと、コロナウイルスによる学生の被害は甚大なものです。

このような異常事態にかかわらず、太田和宏前室長、落合知子統括コーディネーターを中心とする

GSPオフィスの皆さんはオンライン海外研修等の開発・実施を進め、GSPが理由で卒業できない学生が皆無になるまでGSPの遂行に尽力してくださいました。重ねてここに記し、厚く御礼を申し上げたいと思います。

第2の私の任務も、コロナへの対抗に追われて十分に終わってしまったことを残念に思っています。紫陽会事務局の皆さんにお話をうかがいますと、同窓会統合の道のりはまだ決して終わっていないようです。学部長在任中に十分なお手伝いができなかったことが悔やまれます。

他方で、明るいニュースもありました。同窓会のご援助を仰ぎつつ行われた国際人間科学部の第1回の学位記授与式は、2021年3月25日、感染予防対策を万全に講じたうえで、神戸ポートピアホテルにおいて無事に挙行できました。この授与式では、事務室の皆さんの全面的なご協力のもと、学部執行部が各学科の卒業生から2人ずつ選出された学生委員と緊密に連携しながら企画・運営を行い、パンデミック下の様々な制約の中で、厳かながら充実した式を開催できました。

学部長退任後は、附属図書館長を務めながら、一教員として国際人間科学部の発展に少しでも寄与していく所存です。幸い、学部執行部の後任には、学部設置の準備段階の当初から会議とともに協力してきた青木茂樹学部長と西谷拓哉副学部長、そして新設の副学部長ポストには梅宮弘光先生という非常に優秀な陣容を迎えることができました。

感染予防対策は本学でも今しばらく万全に続行する必要があります。このような困難な時代にこそ、紫陽会会員の皆様には、国際人間科学部に対するいっそうあたたかいご支援とご鞭撻をお願い申し上げます。ご挨拶です。



ご縁に感謝

神戸大学 国際人間科学部 事務部長 春名正基

紫陽会会員の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

初めてご挨拶を申し上げます。私は、2021年4月1日付けで着任いたしました春名正基と申します。私個人の紹介は最後に申し上げますが、まずは、ご心配をおかけしております新型コロナウイルス感染症による国際人間科学部の現状、特に「グローバル・スタディーズ・プログラム（GSP）」についてご報告いたします。

学生の海外派遣実績は、2020年度は0名（2019年度は378名）でした。新型コロナウイルス感染症により、2020年度は海外派遣を中止しました。このような状況下にあっても、オンラインを活用した海外研修28プログラム、研修型GSコース（国内フィールド）2プログラムを開発しました。GSPは、オンラインによる海外研修25プログラム、交換留学7プログラム、国内フィールド27プログラムを催行し、実践型GSコースに183名、研修型GSコースに59名、留学型GSコースに8名が参加。国内フィールド学修には、175名が参加しました。

次に、2021年度上半期においては、オンラインによる海外研修15プログラム、交換留学5プログラム、国内フィールド20プログラムを催行し、実践型GSコースに140名、研修型GSコースに83名、留学型GSコースに19名が参加。国内フィールド学修には、200名が参加しました。コロナ禍の厳しい状況にあっても、先生方、GSPオフィス、そして、事務スタッフが一丸となり、厳しい状況であればこそその団結力を活かし、全力で学生を支援しています。

また、紫陽会会員の皆様から、浄財として賜りました「学部支援基金」により、プロジェクターやノートパソコン、ホワイトボード等を購入し、学部における研究・教育の環境整備に活用させていただいて

おります。この場をお借りして、会員の皆様へ心より御礼申し上げます。

さて、私自身のご挨拶が遅くなりました。皆様の中には、ひょっとしたら私のことを覚えていてくださる方がいらっしゃるかも知れません。それは…、発達科学部長から神戸大学長へ就任された野上智行先生の下で、私は約4年間学長秘書を務めました。そのお陰で紫陽会の方々とは現在もお付き合いをさせていただいております。紫陽会顧問の鈴木正二郎様、高田嘉英様、宮嶋昭周様をはじめとする皆様に、駆け出しの私を公私ともに気づかせていただきました。当時の会長でいらっしゃいました難波昭様は、折りにふれてお声をかけてくださり、幾度となく助けていただきました。皆様への感謝の気持ちを忘れたことはございません。

私はまもなく定年退職を迎えますが、国際人間科学部とのご縁を感じています。私の仕事における集大成の場として勤務できることに感謝しています。

甚だ微力ではございますが、“やれることは全てやる”この覚悟を持って対応いたします。どうぞ今後ともご支援くださいますようよろしくお願い申し上げます。

最後になりますが、一日も早い新型コロナウイルス感染症の終息と、紫陽会会員の皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。



学科紹介

国際人間科学部には グローバル文化学科・発達コミュニティ学科・環境共生学科・子ども教育学科の4学科があります。今までも会誌でその概要について取り上げてきましたが、今回はそれぞれの学科に在籍する学生の生の声で、その一端をお伝えしたいと思います。

グローバル文化学科

鶴甲第1キャンパス 入学定員140名

グローバル文化学科2回生 **大森忠矢**

国際人間科学部グローバル文化学科2回生の大森忠矢です。私は神戸市の南西部にある舞子という街で生まれ育ちました。須磨学園高等学校を卒業し、神戸大学に通い始めてから2年半が経ちました。中学生の頃からバスケットボールをしていて、大学でも体育会に所属しています。学習面では、自分が興味のあることを学ぶことができるこの学科で、楽しく勉強に励んでいます。本文では、私が現在所属しているグローバル文化学科の特徴や授業について執筆したいと思います。

まずはグローバル文化学科が養成しようとしている人材についてお伝えします。学科のホームページによると、この学科は「国境を越えたコミュニケーションを推進できるリーダーシップを備えた人材を養成する」ことを目的としています。確かに未曾有のパンデミックに直面している現代社会において、グローバルな課題（グローバルイシュー）に対してリーダーシップを発揮することができる人材は、あらゆる領域で求められていると思います。日本のみならず世界で希求されているような人材を養成するこの学科の授業について紹介します。

本学科の授業は、概論的な授業と演習型の授業に分かれています。概論的な授業では、グローバルという名前の通り世界の様々な地域に関する知識を学ぶことができたり、逆に国内の政治・経済・文化についても深く知ることができたりと、幅広い知見を得ることができるのではないかと思います。また、グローバル文化学科では、「地域文化系」「異文化コミュニケーション系」「現代文化システム系」「言語情報コミュニケー

ション系」の4つのプログラム（2021年～）、「グローバル文化形成」「グローバル社会動態」「グローバルコミュニケーション」の3つのプログラム（～2020年）が展開されており、それぞれの多様な興味に応じた教育カリキュラムが用意されています。さらには、1回生の間から演習型の授業があるので、早い段階で少人数での指導を手厚く受けることができます。

また本学科は長期留学をしたいという学生を後押しするカリキュラムがあることも、大きな特徴として挙げられると思います。交換留学プログラムでは、留学先の大学で修得した単位を神戸大学の単位として認定できるため、1年間長期留学をしたとしても4年間で卒業することが可能です。

以上、グローバル文化学科の特徴や授業について紹介しました。現在はコロナ禍により従来のようなカリキュラムを受けることができてはいません。しかし、それを言い訳にせず学修に取り組みたいです。

発達コミュニティ学科

鶴甲第2キャンパス 入学定員100名

発達コミュニティ学科2回生 **柳楽直人**

発達コミュニティ学科は「人間の発達とそれを支えるコミュニティの実現に取り組む人材を養成する」という目的のもと、「発達基礎」と「コミュニティ形成」という2つの柱を設定しています。「発達基礎」は、人間の心理的発達や身体的発達、表現や行動の機能発達など、人間の生涯全体に関わる課題解決を行うために必要な基礎的な専門教育を表し、「コミュニティ形成」は、人間の多様な相互関係に着目し、グローバル社会と個人をつなぐコミュニティに関する理論の構築と実践的な課題解決を行うために必要な知識に関する専門教育のことをいいます。

発達コミュニティ学科では、1年次は概論等の講義を通じて人間の発達とコミュニティについての幅広い知識を得るとともに、専門的知識を学んでいく上で基礎となる科目を受講し、2年次以降に学ぶ科目の専門性と方向性を見定めていきます。

2年次では、各自の関心や将来の進路などに応じて、5つの教育プログラムの中から1つを選択し、各教育プログラムで開講される専門科目を選択して受講し、より高度な専門性を身に付けていきます。ここからは発達コミュニティ学科の5つの教育プログラムについて簡単に紹介していきます。

「社会エンパワメントプログラム」では社会の様々な局面で生じる課題を発見する能力、対人支援やコミュニティ支援に関する幅広い知識や技術を学び、社会エンパワメントを通してグローバル課題を解決へと導く専門的能力を身に付けます。

「心の探求プログラム」では人々の心の発達における課題を解決するために、人の心とその発達を適切な方法で理解・測定する基礎的能力、現代社会の多様な支援ニーズへの対応方法についての実践的な専門的能力を身に付けます。学問領域は「教育心理学」「発達心理学」「臨床心理系学」など心理学全般です。

「アクティブライフプログラム」では、人々が健康で活動的なライフスタイルを実現するために、心身の健康やエイジング、運動行動、スポーツ活動の原理や方法について学びます。

「ミュージックコミュニケーションプログラム」では人々の文化的で豊かな生活のため、音楽の発信と受信について多面的に理解・探究する総合的能力、音楽の創造的実践的な専門能力を身に付けます。

「アートコミュニケーションプログラム」は人々の文化的で豊かな生活のため、文化・芸術について多面的に理解・探究する総合的能力、美術の創造的実践的な専門能力を身に付けます。美術に関する授業が多く、ポートフォリオを作る講義などもあります。

環境共生学科

鶴甲第2キャンパス 入学定員80名

環境共生学科2回生 **原田 拓明**

初めまして、国際人間科学部環境共生学科2回生の原田拓明です。市立西宮高等学校出身で、中学校からずっとバスケットボール部に所属しています。大学に入学してからもバスケットボール部に所属し、週5で練習に取り組んでいます。今回は、環境共生学科の特徴や入学してから授業を受けてみて感じたことを紹介しようと思います。

僕が感じる環境共生学科の一番の特徴は、入学試験が文系型と理系型の両方あり、知識や考え方が偏らない幅広い性格の人たちに囲まれることができるという点です。入学してから文転した友達や逆に理転した友達もあり、いい意味で型にはまらない人と友達になることができます。また、今はコロナ禍のため交流が少なくなっていますが、留学生も本来であればたくさん在籍しているので、国や文化を超えた交流をすることができます。

また、教員資格を取得しやすいという点も環境共生学科の特徴なのではないかと思います。国際人間科学部は他の学部比べて教員資格が取得しやすく、学科や学科で分かれるプログラムによって、様々な教科の教員資格を取得することができます。さらに、この学科は教育学部ではないので、教育に関わるだけでなく自分の学習したい分野についても深く学ぶことができます。加えて、先述した留学生との交流や、国際人間科学部特有のプログラムであるGlobal Studies Programによって留学もすることができますので、多様な考え方に触れ自分の視野を広げることができます。この点も、教育に活かすことができるのではないかと思います。

次に、授業の特徴として、学科のミッションとして挙げられている「環境基礎科学」「環境形成科学」の2点が色濃く現れていると感じます。理系プログラムで行われる理科の授業では、物化生地のどの授業であっても自然現象や環境と結びつけて授業が進められます。文系プログラムで行われる授業では、

環境について様々な学問分野から、広い視野を持って考察する授業が多いです。思想についても学ぶことができ、現代の社会を形成する上で重要になる議題について学ぶことができます。また、2回生以降は専門的な授業が増え、プログラムに分かれて授業を受けることが多くなるので、人数が少なくなり教授に質問しやすい相互的な授業を受けることができるようになります。

以上の特徴からわかるように、環境共生学科は環境問題について学びたい人、教員を目指したい人にとって特に最適な学科だと僕は思います。ぜひ、オープンキャンパスなどに足を運んでみてください。

子ども教育学科

鶴甲第2キャンパス 入学定員50名

子ども教育学科2回生 **米 崎 亮 佑**

今日はこの紙面において、子ども教育学科について紹介させていただきたいと思います。

私は将来、絶対に教師になりたいという理由でこの学科に入ったわけではありません。しかし約1年半もの間、子ども教育学科の授業を受けてきたことで、教師になりたいという願望が出てきました。子ども教育学科では、まず、自分が取りたい免許に応じて履修する授業科目が決まってきます。大まかには、小学校の教員の免許を取得することができる学校教育学コースと、幼稚園の教員・保育園の保育士の免許を取得することが出来る乳幼児教育学コースの2種類のコースのどちらかを選択します。また、特別支援学校の教員の免許や、中学校の教員の免許を並行して取得することもできます。

私の友達の中で、幼稚園の教員、小学校の教員、特別支援学校の教員の3つの免許を取得しようと考えている人もいます。

たくさんの免許を取得するには、たくさんの授業を受け、実習に行かなければならないことは大変ですが、とても有意義であると思います。

私自身は、小学校の教員の免許を取得したいと考えているので、学校教育学コースに所属し、授業を

受けています。

先程も述べたように、学校教育学コースでは、小学校の教員の免許を取るための授業が行われています。例えば、授業の目標を定め、児童の反応を予測しつつ、どのような順序で授業を進めていくのかを考えるという学習指導案作りの授業や、学校や教科書の歴史についての授業などがあります。

また、学校教育学コースに所属していたとしても、乳幼児教育学コースの授業を受けることも可能であり、逆に、乳幼児教育学コースに所属していたとしても学校教育学コースの授業を受けることも可能です。

子どもについて興味のある人、子どもについて勉強したい人にとって、非常にカリキュラムが整った学科であると思います。

最後に、学科の雰囲気について話したいと思います。去年コロナ禍でまともに学校に行けず、学科で友達ができないのではないかと心配していましたが、学科内でZOOM会を仕切ってくれる仲間がいました。そしてそのZOOM会を通して友達がたくさんでき、今では大学生生活が過ごしやすいです。

このように、子ども教育学科には様々な企画を仕切ってくれたり、話しかけてくれたりする仲間がたくさんおり、アットホームな雰囲気でもとても良い学科であると感じています。



コロナ対策下の2021年度学部ガイダンス

GSP（グローバル・スタディーズ・プログラム）体験記2020

GSPは、これからの時代を切り開いていく学生たちに、海外経験によりグローバルな視野、知見を獲得させようとする国際人間科学部の最も特徴的なカリキュラムです。しかしながら、昨年度からのコロナウィルス禍の中、学生の渡航はできず、海外経験はできませんでした。その代替として、2020年度はオンラインでの海外大学との交流経験や、教育や環境、福祉などいずれはグローバルな広がりを持つであろう課題について、学生たちは国内での体験学習に取り組みました。

今年は、その体験学習に参加した学生の体験レポートをお届けします。

レポート①

世代を超えた環境保護に向けた学び

発達コミュニティ学科2回生 **平出将悟**

今回私が参加するGSPプログラムは兵庫県南但馬自然学校において小学生の宿泊研修のサポートをするプログラムです。このプログラムに応募した理由として私が関心を持っているグローバルイシューである環境問題があります。

私は環境問題の中でも「世代を超えて環境を保護する方法」について興味を持っています。そこで、今回の自然学校の研修において私たちの次の世代を担う小学生たちの自然学習をサポートすることを通じて、彼らが自然のどのようなところに興味を持つのか、対話や観察を通じて学び、彼らと同世代の子どもたちに対して環境保護を啓発するにはどのようなアプローチが有効かを探る機会にしたいと考えています。

先月、本プログラムに参加する学生は参加することが必須の南但馬自然学校で開催される自然学校講座という2泊3日の宿泊研修に参加させていただきました。その際に何枚か撮影させていただいた写真が次のものです。写真からも伝わるように、非常に自然が豊かな場所で、よく言われている「空気が美味しい」ということを実感することができました。また、21年間生きてきて人生で初めて流れ星を見ることができ、非常に充実した時間を過ごすことができたと共に、このような素晴らしい自然を守っていかなければならないということを今まで以上に重

く考えさせられるようになりました。自然学校講座の中では、小学生が自然の中で活動を行う際のリスクマネジメント等、児童たちに安全に自然と思う存分触れ合ってもらうために私たちができること、行わなければならないことを学習しました。また本講座全体として、南但馬自然学校では児童たちに自然学校でしかできないような自然と触れ合う体験をしてもらうことを重視しているように感じられ、自然



豊かな自然の中で



自然学校の夜

の中でしかできないことを楽しんでもらう、ということが自然について関心を抱いてもらい、環境問題に目を向けてもらう1つの足掛かりになるのではないかと感じられました。これらのことを踏まえて、自然学校で児童たちと関わる場では彼らに自然との触れ合いを楽しんでもらいつつ、その貴重さ、尊さを伝え大事にしていかなければならないということを手早く伝える方法を考え、実践していこうと考えています。

レポート②

GSPで「西宮ストークス」

グローバル文化学科2回生 **大 森 忠 矢**
環境共生学科2回生 **原 田 拓 明**

●GSP国内研修型プログラム、「Bリーグ西宮ストークス」について大森が執筆します。

本プログラムは、現在B2に所属しているプロバスケットボールチーム西宮ストークスにおいて、球団経営、選手トレーニング、地域・企業・学校との連携の現場に関わりながら、スポーツ産業およびスポーツの可能性について学び、考えます。また、新プロジェクト“Hometown Action”「スポーツエンターテイメントを通じた地域貢献」を、ストークス側と協力して完成させることを目的としています。本プログラムは今年度から始動したため、既存のプログラムを体験する形ではなく、学生自らが考えて実行することで新しいプログラムを作り上げる形となります。

これまでは、事前学習としてメンバーでミーティングを行ったり、ゲストスピーカーをお呼びしてお話を聞いたりしました。球団スタッフの方にストークスやBリーグの現状について説明を受けたり、福岡ドームプロジェクトに携わってらっしゃった榎野孝人氏をお招きしてお話を伺ったりと、ストークスでの活動のヒントとなる貴重な学習機会となりました。今後の活動としては、今シーズンの開幕戦を実際に観戦した上で、実際に球団に直接どのように関わっていくのかを検討していきます。その中で、ス

ポーツエンターテイメントを通じてどのように地域貢献ができるのかを模索しつつ、具体的な企画を提案し実行していけたらと考えています。

●数あるGSPプログラムの中で、なぜ「西宮ストークス」を選んだのかを原田が紹介します。

僕は中学校からバスケットボールをはじめ、そこからずっとバスケットボールが好きでした。さらに僕の高校は西宮ストークスさんのホームコートである西宮市中央体育館のすぐそばにある市立西宮高等学校です。そのため、僕は西宮ストークスさんを応援しており、何度か試合も観戦していました。また、僕が高校一年生の時には西宮ストークスさんが部活動にクリニックに来てくださり、大変お世話になっていました。中央体育館で行われている西宮ストークスさんのクリニックにも何度か参加させていただき、僕にとってとても親近感のあるチームでした。そのようなチームに協力していただいて活動をさせていただけるプログラムが新しくできたと聞いて、僕のように西宮ストークスさんを知り応援してくれる人をもっと増やしたい、応援しているチームに少しでも貢献したいという思いから、このプログラムへの参加を即決しました。これからの活動を通して、少しでもチームの役に立てるように頑張りたいと思います。

神戸大学は来年度（2022年）創立120周年を迎えます。これは、その関連事業のロゴマークです。コロナ禍を乗り越え同窓生がつながる良い機会になるといいですね。



国際人間科学部の“つながり”

～学位記授与式レポート～

津 阪 菜 名 ・ 加 藤 優 汰

国際人間科学部 子ども教育学科 2021（令和3）年卒

2020年、私たちの学生生活は大きく変貌しました。新型コロナウイルス感染症拡大に伴う対面授業や課外活動の制限を受け、一刻も早くウイルスとの戦いに終止符が打たれることを願いながら自宅に籠り、大学生生活最後の1年が流れて行きました。しかし、この1年間の思い出が全く無いという訳ではありません。卒業に際し、学位記授与式を執り行えたことは私たちの学生生活の貴重な思い出の1つとなっています。そして、その企画・運営に携われたことを光栄に思います。

思えば、実行委員のご依頼をいただいたのは、前年度の祝賀会・謝恩会の頃でした。この時期、突如現れたウイルスが猛威を振るい、1つ上の先輩方の門出を祝う場は奪われてしまいました。4年間を共にした仲間と思い出を分かち合うことなくそれぞれの道に進むことになってしまった先輩たちの姿に、私たちは胸を痛めました。

それから1年間、私たちはコロナ禍における新しい会の形を模索しました。コロナの状況を先読みしながら計画を進めることは困難を極めました。まず、コロナ禍でも飲食のできる会の様式について何度も議論しましたが、飲食は全面禁止となり、学位記の授与に主目的を置いた学位記授与式という名のもとに開催することとなりました。これに伴って、会場をお借りして式を開催するに値するプログラムを考え直す必要がありました。議論を重ねた末、各学科から有志を募り、出し物を披露することになりました。様々な分野を扱う国際人間科学部には歌やダンス等の表現を専門とする学生もおり、コロナ禍でそうした表現活動を披露する場が失われていたことから、この企画は有意義なものと思われました。

ところが、卒業が迫ってもコロナの状況は一向に改善せず、式自体を大幅に短縮する必要が出てきました。これまで考えた企画は全て白紙に戻し、大人

数が集まる国際人間科学部として式を行うこと可否という根本部分から考え直さなければなりませんでした。しかし、私たちには強い思いがありました。新学部1期生として、各学科や先生方との“つながり”を大切にする国際人間科学部のあり方を確立したいという思いです。1期生である私たちがつながりを欠けば、この学部は4学科バラバラの学部になってしまうという危機感がありました。そこで、極力短時間の中で学部として集まる時間を取って代表者による学位記授与等を行い、その後すぐに比較的密を避けやすい学科単位に分かれて分科会を行うことにしました。分科会でも指導教員より学位記を手渡しするのみとし、式全体を2時間以内に収めました。また、式の様子や私たちの意思を後輩たちに知って貰うため、3回生数名を補助員として招きました。

こうして幾多の苦悩の末に何とか開催できた学位記授与式は、心に残る特別な式となりました。4年間を支えてくれた友人や先生方に対し感謝の気持ちを丁寧に述べることができました。そして、4年間あまり意識してこなかった国際人間科学部のつながりを感じることができました。最小規模の短い授与式となってしまいましたが、これから社会に羽ばたいてゆく集団として、国際人間科学部1期生として、正しい選択が出来たのではないか思うと同時に、感染拡大防止を念頭に置きつつ無事に式を成功させることが出来たことを誇りに思います。

この会を開催するにあたって、紫陽会の皆様をはじめ、多くの方々にご支援いただきました。特に前学部長の櫻井先生、前事務部長の小紫様には大変ご尽力いただきました。心より感謝申し上げます。困難な状況が続きますが、国際人間科学部の“つながり”を大切にする姿が今後も引き継がれていくことを、私たちは願っています。

2020（令和2）年度 | 神戸大学学位記授与式

国際人間科学部としての初めての卒業式、学位記授与式が3月25日（木）に開催されました。ポートアイランド・ホールで行われた卒業式には、新型コロナウイルス感染防止のため、参列できませんでしたが、午後にはポートアイランドホテルで行われた学部の学位記授与式には青木会長、笹副会長、宮嶋顧問の3名が参列しました。

新型コロナウイルス禍の終息の見えない厳しい状況の

中でしたが、大学関係者と実行委員を務めてくれた学生たちの熱意が実を結び、シンプルですが気持ちの良い式が行われました。

そのあと、各学科に分かれそれぞれお世話になった先生方から、学位記を渡してもらいました。その時の学生たちの輝いた笑顔が印象的でした。

最後になりましたが、紫陽会からは昨年同様クオカードをお送りし、お祝いの気持ちを伝えました。



2021（令和3）年度 | オリエンテーション（同窓会紹介）

4月6日（火）午後、午前中の入学式に引き続き学部オリエンテーションが行われました。今年はコロナ感染防止の密回避のために4学科が4会場に分かれ、説明者はzoomを利用して話すというオンライン説明になりました。コンピューター画面に向かってのプレゼンも当たり前になりつつある昨今、

IT機器の進歩に感心するとともに、対面のあたたかさを感じないさみしさも感じました。

紫陽会からはお祝いの言葉とともに、紫陽会の歴史や活動内容をアピールし、今年極めて不調の会費納入を強くお願いしました。さて効果のほどは？

第15回神戸大学ホームカミングデー

昨年度開催を予定されていた第15回ホームカミングデーはコロナウイルス感染症防止のため中止、2021年度に延期となりました。今年度もコロナウイルスの感染状況を考慮し、9月末現在でオンライン形式での開催が決まっています。国際人間科学部の学部企画は旧国際文化学部と旧教育学部・発達科学部のそれぞれから現在の学部、学科の様子が配信される予定です。詳しくは次年度会誌で紹介できればと思っております。

紫陽会賞

学術研究、スポーツ・芸術などの文化活動、社会貢献活動などにおいて顕著な功績を残されている会員、準会員の功績をたたえ、さらに今後の活躍を祈念するために設けられた



紫陽会賞も今年度で第11回を迎えました。昨年度に引き続きホームカミングデーでの授賞式は実施できませんので、第10回、第11回受賞者の方には、会長から個々に紫陽会賞をお渡しすることとしました。

第10回紫陽会賞受賞の 戸田 紘氏、和田 彩氏の両氏からは、本会誌にそれぞれの歩んでこられた道や研究活動について寄稿いただいています。

第11回紫陽会賞受賞者は大学から推薦いただいた以下の準会員の方3名です。力のある若い研究者が国際人間科学部から育てていることは同窓会として大きな喜びです。

〔第11回紫陽会賞受賞者紹介〕 準会員の部

坂田 雅之 氏 2021年 人間発達環境学研究科博士課程後期課程修了

「環境DNA分析」に関する研究に取り組み、堆積物中のDNA情報を用いて、現在あるいは過去の生物情報を取得する手法を確立した。

・2017年、2018年 日本陸水学会 優秀口頭発表賞 受賞

徐 寿明 氏 2021年 人間発達環境学研究科博士課程後期課程修了

「環境DNA分析」に関する研究において、海産魚の環境DNAの残存状態や放出後動態に関する様々な知見を明らかにし、その実用化に向けた基盤情報の整備に貢献した。

・2016年 日本生態学会 最優秀ポスター賞 受賞

・2018年 環境DNA学会 最優秀ポスター賞 受賞

木元めぐみ 氏

日本語韻律の定量的な分析手法について、方言による比較を用いて検討し、日本語イントネーションの特徴を明らかにした。

・2019年 第33回日本音声学会全国大会 優秀発表賞 受賞

第10回紫陽会賞受賞者から

故郷（淡河）の歴史に想う

戸田 紘

神戸大学教育学部（初等教育科） 1964（昭和39）年卒
 大阪音楽大学短期大学部（音楽専攻） 1970（昭和45）年卒
 神戸大学法学研究科博士課程前期課程 2016（平成28）年修了

生まれ故郷の淡河（神戸市北区）を離れて約40年、齢75頃になって、自分が故郷の歴史を何も知らずに生きてきたことに気付いた。淡河に関する歴史と言えば、城主淡河弾正定範が三木城主別所長治に与して、信長に命令された秀吉に敗れ去ったという史実を知るのみであった。

そこで、「淡河史」を編もうと思い立ったが、歴史については全くの素人であることに気付き、自身が歩んだ38年間に及ぶ教職の経験が生かせないかと考えた。「神戸市北区淡河町の学校園史考（小学校編）」から取り掛かることにしたのである。校区の淡河小学校、好徳小学校へ度々足を運び資料提供など全面的な協力をいただいた。小学校教育の原点は明治の学制発布に遡り、寺子屋を母胎として出発し、村の教育行政は、村行政の大半を占めることが判明したのであった。

戦後、（新制）中学校は「無」から出発した。旧淡河中学校は、姫路海軍鷲野飛行場（現加西市）の旧兵舎の廃材を国からの払下げによって建築され、旧上淡河中学校は、好徳小学校に併置されたのである。国は方針を示すが校地校舎については、地元負担が原則であった。教育の充実は、村の負担能力と熱意に左右されるものであった。現在の淡河中学校は新しい場所で神戸市立の中学校として、生徒の減少という農村地域の過疎化の問題を被った運営を余儀なくされている。

三つ目に「兵庫県立有馬高校淡河分校史」の編纂に取り掛かった。国は国民の大半を占める中堅層の育成のために新制高校の創設を図ったのであった。淡河の先達は先見の明を発揮して、淡河に幼小中高一貫教育の構築を企図したのである。この時も中学校同様、校舎の建設費用に窮した。小学校に併設されて発足したが、当時の在校生が、農家で農作業をして得た手間賃を、建設資金に提供したというエ

ピソードもある。昭和23年に発足した淡河分校は、昭和48年に兵庫県立神戸北高等学校に統合され25年の歴史に幕を閉じた。

最後に「淡河好徳幼稚園」である。旧淡河幼稚園は淡河小学校に併設されていた保育所をもとに昭和30年に村立淡河幼稚園として発足した。東校舎（間仕切り3教室）の2室を使用していた。小学校が行事（入学式、学芸会、卒業式）の時は、その3教室の間仕切りを解いて使用したので、その期間は和室（1部屋）に90名近くの園児たちが収容された。独立園舎は昭和39年まで待たねばならなかった。好徳幼稚園は昭和34年に淡河幼稚園好徳分室として発足し、平成7年に新独立園舎へ移転し、淡河・好徳両園は、平成22年に淡河幼稚園の地で「淡河好徳幼稚園」として再出発した。

「神戸市北区淡河町の学校園史考」を編んで気付いたことがいくつかある。

- 戦後の社会壊滅状態の中で、幼小中高一貫教育の構築を企図し、実現した村の先達の先見の明は尊敬に値すること。
- 戦前戦後にわたって教師を務めた両親が筆者に、戦前の教育について一言もなかった理由が判明したことである。戦前の教師はGHQにその教育を全面的否定され、戦後も教壇に立つには、自身も否定しなければならなかった。二人とも鬼籍に入っているので聞くことは不可能である。
- 教師は、地域の歴史を学ぶことなく、教育に携るのは、根無し草に花を咲かせる行為に等しいといえまいか。地域社会の熱意、保護者の期待、児童生徒の願いを基礎づける地域の歴史をベースに38年間務めてきただろうか。冷や汗の出る思いであり、〈痛恨〉は、正にこの一点にある。

今、「淡河史」の編纂に取り掛かっている。資料収集はほぼ完了している。淡河で発見された遺跡、古文書から、縄文・弥生時代から江戸時代の証拠が獲得でき感激に浸っている。



第10回紫陽会賞受賞者から

出会いの中で

和田 彩

神戸大学教育学部 1991 (平成3) 年卒
 神戸大学大学院学校教育研究科 1993 (平成5) 年修了
 神戸大学大学院総合人間科学研究科 2010 (平成22) 年修了

私は神戸で生まれ育ちました。幼少より書道を学び、書の古典を知り興味をもったことが、私の書の原点であります。

私はいつも出会いに恵まれました。神戸大学教育学部に入學し、青木務先生の指導のもと、木から生まれる紙の研究をすることになりました。神戸大学大学院学校教育研究科に進んでも紙の研究は続けました。修士論文は青木務先生の指導で「書道紙に関する研究」でした。この紙の研究は私の書制作に役立っています。このころ、書道展に出品し入選、兵庫県書道展の前衛書部門で神戸市長賞を、漢字作品で飛雲展藤原清洞記念賞、毎日展毎日賞を得ることができました。

その後、神戸大学大学院総合人間科学研究科の博士課程に進み、魚住和晃先生、影山純夫先生に出会いました。魚住先生の指導で書道史を学び、「筆墨書跡のコンピューター分析」、「墨文字の墨色に関する研究」など多様な研究を行いました。先生方の温かいご助言と熱心な指導のもと博士論文「古典筆墨書跡の解析に関する新研究—コンピューター画像処理による分析方法の開発と展開—」で博士号学位を得ることができました。

私の書作品は2004年にした神戸外国倶楽部での個展が神戸新聞に取り上げられ注目されました。さらに神戸ビエンナーレや韓国の世界書芸全北ビエンナーレに出品し、書のもつ国際性に意識するようになりました。私は海外での個展を考えるようになり、魚住先生がワルシャワ大学を紹介してくれました。ワルシャワ大学の岡崎恒夫先生は在ポーランド日本大使館での個展開催への道を開いてくれました。大使館で個展ができたのは本当に幸運でした。

日本大使館での個展は、東洋の書の線を意識して前衛書と漢字作品を出品しました。材料は紙と墨、とくに和紙にこだわりました。兵庫の杉原和紙や名

塩和紙、鳥取の因州和紙を使いました。和紙の独特な味はそれだけで日本的なものとなります。嬉しいことに、この個展にポーランドの美術関係者が多数来場し、当国での新しい展覧会の話も進みました。

これらポーランドでの展覧会や一連の展覧会活動が評価され神戸市文化奨励賞を受賞することができました。

2019年にポーランドより2度目の個展の要請がありました。日本の石庭をテーマにしました。私は日本の庭が好きです。とくに石庭には日本の伝統と精神が存在しています。枯山水には究極の美があります。庭の箒の掃き目の文様が私の作品に大きな影響を与えました。私は石庭で感じた空気を書の線で表現しました。石庭の文様から導き出した書を和田彩書芸術として世界にもっていったのです。

昨年からは映像の仕事が入るようになりました。舞子の浜、神戸大学のキャンパス、神戸の街、ポーランドで書く私の姿と書作品の映像をいくつも作りました。

今はワルシャワ大学での研究発表のための映像作りと、コロナ禍のため来年以降に延びたパリの個展のための作品作りをしています。和田彩の書の世界が飛躍します。それらが評価され、この度神戸大学から紫陽会賞をいただきました。本当に嬉しく思います。



「光と影」三千院 (杉原和紙)



古代文字「龍」字による (名塩和紙)



「飛燕」字による (金和紙)

講座「生徒指導」

今年は50分の動画で…

栗木 剛

教育学部特殊教育学科 1982（昭和57）年卒

10年前から毎年伺っていた90分の事前実習ですが、昨年度は珍しく依頼を断ってしまいました。原因はコロナ禍の影響です。大学から紫陽会を通じて、対面講義ができない状況なので、オンデマンド型の講座での依頼だったからです。ただ、対面講義にこだわったわけではなく、動画配信だと思い込んでOKしていたのですが、学生側の通信容量の制限から資料提示のみで…というお話になったので、勘弁していただきました。というのも、私の講義形式はいつも資料・レジユメ類、視聴覚機器や黒板も使わない、『口と身振りだけ』のやり方だからです。ちなみに原稿も作らず、学生の表情・反応から話材を進めるという方式です。

この事前実習の講師陣は、長年教壇で勤め上げられた先輩や現職の付属学校教員の方で構成されている中、私だけが教員をたった6年で辞めた自営業者で、公民館や社会福祉協議会などでの講師業なのです。正直、動員や当番で、仕方なく（苦笑）参集される地域の方々を対象なことも多いので、『楽しくなくっちゃ講演会じゃない！』を掲げてお仕事しています。その関係で『書かせない、読ませない』が日常化していたもので…。その結果、昨年度は学内の職員が代わって担当されるという迷惑をかけてしまったようです。すみません。

で、本年度のご依頼の折も同様の状況だったのでお断りすると、担当職員の方から、『学生の通信環境も整ってきたので、1人だけなら動画でもOK』というちょっとズルい抜け道(?)の提示があったのです。それではということで、ご依頼の条件にあった通り、視聴途中で学生がちょっと休める何度かの編集ポイント（いわゆる切れ目）を入れての約50分の動画を作成いたしました。それを大学の方で、視聴期間と対象限定のYouTubeアップしていただけたようです。ホントお手数をおかけいたしました。

前にテーブルを置いて、胸から上だけの画角

で、隣にはひょうきんなカエルのぬいぐるみを置き、それにカンペを持たせてテロップの代わりにして、いつもの通りのやんちゃな進行でしゃべったわけです。講話内容はほぼ例年通りで、『実習時には、良かれと思って勝手に生活指導をしてはいけない！』とか、『家族や教師以外の人間（実習生）が触れ合うこと自体が、子どもたちにとっては新たな人間関係という生活指導かも…』とか、『標本箱のような担当クラス内の子どもたちを観察することが、学生自身の将来の教師像・保護者像をつくる生活指導』なんていうちょっとエラそうな話です。（苦笑）

ま、それを5泊6日の自然学校の技術指導員での体験など、社会教育の場から見える子どもたちの現場での『事件！』のエピソードを交えつつ、身振り手振りを多用してお話ししています。そして最後にいつも、実習期間中の健康第一に努めて、子どもたちから情報を得るためのアンテナを研ぎ澄まさせていただきます…と締めくくっています。

いかがでしょう。言い方は悪いかもしれませんが、こんな感じでも大学からOKをいただいています。各人の得意なパターンでのアプローチが学生にも効果的なようです。紫陽会のみなさん、奮って手を挙げていただき、『今年の事前実習は誰に行ってもらおう…』と事務局を悩ませてみませんか。



鶴甲第1キャンパス 芝生グラウンド

言葉の向こうに響くもの —教育実習事前実習を終えて—

板東克則

教育学部特殊教育学科 1980（昭和55）年卒

「余計な固定観念を削ぎ落とし、相手を受容できるスペースを自分の中に空け、『家庭に対する想像力』を働かせる必要を感じた…」ある学生の感想の一部である。

教育実習事前実習として、「家庭との連携」がテーマの講義だったが、コロナ禍の中、資料配布によるオンデマンド型講義になった。

教材作成にあたり、私が念頭に置いたのは「言葉の無用」である。保護者と話す中で、言葉を聞くのではなく、言葉の向こうにあるものを聴くこと。根を探りながら、聴く。「哀」という字をあてはめて聴く。そういうことを、実例を挙げながら説いた。

かつて、先輩から教わった「保護者とは、一生、付き合いなさい。」という言葉。私もある保護者との20年近い付き合いを経験することによって、少しその重さと味わいを噛みしめる実感を持つことができた。この言葉にも、学生から大きな反響があった。

私自身の学びや想いが伝われば、と思いつつ資料の作成に励んだ。

「自分の中に強く響いた感覚がした」「教師を志す者として、響くものがあった」という感想が見られる。他にも「受容と傾聴」「根本の原因に耳を傾ける」「言葉の裏に隠されている気持ちを見つける」「話の根っこにどのような思いがあるのか」「聴く力」などの言葉が随所にみられる。ともすれば、保護者対応に不安を感じていた学生の中で、何かが変わり始めている。冒頭の感想を含め、想いは届いたのではなかろうか。

4月より、姫路大学教育学部に籍を置き、学生と語る中で、彼らの若く瑞々しい感性には驚かされる。この度の事前実習の神戸大学の学生の感想からも、同じものが読み取れる。教育を志し、その本質を求めようとする姿には、何ら変わりはないのだ。

かつて、私たち自身が森信三に学び、伊藤隆二の言葉に導かれたように、若い感性はしなやかに伸びようとしている。そこには、手を取り、導いてくれる先輩の姿があった。

「授業を受ける前と受けた後では、子どもは生まれ変わっていなければならない。授業は子どもを変容させるものだ。」先輩に教わった。何と厳しく、適切な言葉だろうか。果たして、自分の講義は、若い感性にこういう刺激を与えることができているのだろうか。

言葉の向こうに響くもの…

言葉は、嘘をつく。想いは、裏切ることはない。それは、教師として、保護者と向き合う中で、何よりも胸に秘めておくべきものである。

言葉に表しながらも、言葉では伝えられないものを伝えたい。その想いが幾分かかなりとも届いたことは、感想の一つひとつから読み取ることができた。

ただ、今回の講義は、彼らに変容までもたらせるものだっただろうか。教育の深さと、教師という仕事の素晴らしさを伝えることができただろうか。それは、受講者一人ひとりが今後どのような道を歩もうとするかで、自ずと明らかになるだろう。

寄せられた50の感想に、一つひとつ返信を書き込んだ。それは、一人ひとりに対する私の想いであり、私の自戒でもある。そして、一人ひとりに寄せる私の期待でもある。

（姫路大学 教育学部子ども未来学科）

東京支部

東京六甲クラブ50周年記念合同演奏会
～同窓生による大イベントの思い出～

鈴木 香代子

教育学部音楽科 1976 (昭和51) 年卒

紫陽会関東支部同窓会は昨年も今年も開催見送りとなりました。そこで今回はもう4年前のこととなりましたが、教育学部・発達科学部の同窓生が合唱、およびオーケストラに多く参加されたイベントを参加者の一人としてご報告申し上げます。このコロナ禍に明るい話題となれば幸いです。

2017年6月18日『神戸大学東京六甲クラブ50周年記念合同演奏会』が「かつしかシンフォニーヒルズモーツァルトホール」(東京都葛飾区)にて開催されました。神戸大学東京六甲クラブ理事の皆様と各団代表を中心に実行委員会が結成され1年以上かけて企画・運営。演奏会当日は合唱・管弦楽参加総勢160名、お客様900名の大イベントとなり成功裡に終えることができました。

《参加団体》

合唱： 東京六甲男声合唱団 (神大グリークラブOB中心に発足)、神大混声合唱団アポロン関東OB有志、女声アンサンブル「Belmonte六甲」(“ベルモンテ”神大教育学部音楽科同窓生)、KCめぐみ(神戸女学院在京同窓生)

他神戸大学同窓生有志 友情出演の皆様

管弦楽：東京六甲フィルハーモニーオーケストラ
(神戸大学交響楽団在京卒業生)



『神戸大学学歌』を歌う卒業生

演奏会は神戸大学卒業生による「神戸大学学歌」(安水稔和 作詞 中村茂隆 作曲)で幕を開けました。

第一部は『コーラスの楽しみ』と題し、各合唱団が練習を重ねてきた歌の数々を披露。

第二部は『合唱とオーケストラ合同演奏によるオペラ合唱名曲集』参加者全員による熱唱・熱演が繰り広げられました。指揮中島良能(神大経営学部卒)

※第二部とアンコールはYouTubeにてご覧いただけます。「東京六甲クラブ50周年記念演奏会神戸大学響友会」で検索。ヴェルディ『ナブッコ』より「黄金の翼に乗って」、ワーグナー『タンホイザー』より「序曲」他5曲がご視聴いただけます。アンコールの「ウィーン我が夢の街」2番では「神戸おまえは心の故郷幸せ溢れる夢の街!」と高らかに歌っています。(各団への問い合わせは東京六甲クラブまで。またクラブの詳細はホームページをご覧ください)

<https://www.rokko-club.jp/>

参加者の情熱とお客様の暖かい応援により故郷から遠く離れた東京に炸裂した“関西パワー”?! のご報告と共に来年は紫陽会東京支部同窓会の開催と、紫陽会の皆様と共に東京六甲クラブあげでのイベントに参加できる日が来ることを願ってやみません。



大阪支部

コロナ禍における大阪市の教育と大阪支部の現状

支部長 清岡延吉

教育学部初等教育科 1981（昭和56）年卒

紫陽会大阪支部は、毎年2月に総会と懇親会を開催しています。開催は37回を数えるまでになりましたが、昨年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、残念ながら大阪支部総会・懇親会の開催を見送ることにいたしました。

大阪支部の会員は、学校現場の教員だけでなく、教育委員会事務局、教育センター、こども青少年局保育施策部保育所運営課、大阪教育文化振興財団放課後事業課（「いきいき」活動）、日本語学校の教員2名、大学の教員3名、お住まいの市の保護司など、実に様々なところで活躍されています。また、趣味を活かして日々の生活を過ごされている方もあります。

新型コロナウイルス感染症は、本年度に至っても変異株の感染拡大等、まだまだ収束への見通しが立たない状態が続いています。

昨年度から、先の見通せない状況のなかで、学校現場では時には迅速な変更を、時には苦渋の決断を迫られることが多くありました。大阪市では5月の時短登校の際の一人一台の学習者用端末でのICTを活用したオンライン学習と通常学習との併用については、戸惑いながらも工夫しながら学びの保障を行ってきました。今後、オンライン学習を円滑に進

めるための環境の整備が大きな課題です。

これまであたりまえのように実施してきた水泳指導や運動会、修学旅行や林間学習、児童会活動など様々な教育活動の実施にあたって、私が9年間校長として勤務しています大阪市立高殿南小学校（児童数197名）では、教職員とともに知恵を絞り学校ごとの「最適解」を求めるために、日々奮闘しています。教育委員会からの指示事項をふまえ、本校の子どもにとって何がいちばん大切かを考え学校運営にあたっています。

コロナ禍において、登校時の健康チェックに始まり、手洗いやマスクの着用の指導、そして、消毒・清掃作業、さらには、ICTを活用した新たな授業づくりにも挑戦する教職員の姿に本当に頭が下がる思いです。どのような状況であっても、学校はすべての子どもたちが安心して楽しく通える魅力的な場所でありたい、そういう思いが教職員を動かしているのだと思います。子どもが「元気に登校、笑顔で下校」できる学校をめざしています。

新型コロナウイルス感染の収束の見通しがたち、感染状況が落ち着いた頃には、大阪支部総会を開催したいと考えております。その折にはぜひ会員の皆さまと再会を喜び合い、絆を深めたいと思っています。皆さまには健康には十分ご留意いただき、日々お元気でご活躍ください。

（大阪市立高殿南小学校長）

姫路支部

感染症対策に翻弄されながら走り続ける学校現場より

梶原潤一郎

教育学部特殊教育学科 1983（昭和58）年卒

令和2年2月27日木曜日の夕方、時の首相が臨時の記者会見を開き、全国の学校に対して3月2日

月曜日からの臨時休業の要請を行った。いきなり、「明日が本年度の最後の日です」と言われて、文字通り途方に暮れるような事態だった。しかし、職員室では、全職員がすぐに状況を理解して動き始めた。

当時は学校の臨時休業の可能性が取り沙汰されており、本校でも、学年の履修を終えるのにかかる日数などについて職員室の話題になっていた。しかし、あ

のタイミングで臨時休業に入ることは、青天の霹靂以外何者でもなかった。誰も経験したことのない全くの想定外の状況の中で、なんとか対応できたのは、何よりも学校という組織の持つポテンシャルの高さによるものであり、とりも直さず、教職員一人一人の能力の高さと、子どもを育むという共通の目的を有する教職員集団の質の高さによる、と強く感じている。

3月2日に始まった臨時休業では、卒業式は挙げてきたものの、終業式はできず、4月6日と7日に登校日を設けて、始業式と入学式だけをおこなった。ようやく学校が日常を取り戻したのは、6月1日であった。再開されても、学校生活全般にわたって三密の回避やソーシャルディスタンスの確保等が厳しく求められた。文字にすると20字程で書き表せるが、子ども達が互いに学び合うことや他者から学ぶということが不可欠な学校で、求められたことを実現するためには、学習や生活の具体的な場面一つ一つで細かな工夫や配慮を積み重ねていくことが必要である。

また、今後も実施されるかもしれない長期の休業に備えて、ICTを活用した在宅学習への準備も求められている。姫路市では、コロナウイルスによるパンデミックが起こる前からICTを活用するための環境構築に取り組み、数年かけて整備する計画であったようだが、パンデミックの中で急速に整備が進み、子ども一人一人に、タブレットPCとgoogleをプラットフォームとするためのIDが配布された。しかし、ハードウェアやソフトウェア環境が整ったからといっても、子ども達がすぐにICT環境を活用して学習することができるわけではない。教師も、実践の積み重ねやノウハウの習得が必要である。また、子ども達の「学び」には、具体的な操作や五感を通じた体験が不可欠である。モニターを通して自転車の乗り方を教えてもらっても、乗れるようにはならないのと同じである。

感染症対策を踏まえた教育活動のあり方とICT機器を活用した教育活動のあり方は、それぞれ教育活動の本質的な部分からの検討を必要とするものであるが、臨時休業の要請に始まる今の事態は、このような課題を乗り越えて遅滞なく取り組むことを学校現場に求めている。普通に考えれば、時間をかけ

て検討しなければならないことであるが、目の前にいる子ども達には、今しか体験できないことがある。今、学校は走りながら考え、教育実践に取り組んでいる。困難な状況であるが、学校と教職員の持つ力で、しっかり乗り越えていかなければならないと考えている。

分散登校の教室（4年生）

令和2年6月に新年度が始まったが、給食が再開されるまでの2週間、午前と午後に分けた分散登校を実施した。午前の授業も午後の授業も同じ内容で、昨年度終えることができなかった単元の学習を行った。



令和2年5月22日登校日の教室

児童玄関前の検温

子ども達は、登校する前に体温を測り、登校後、校舎に入る前に教職員に熱がないことを確認してもらう。



令和2年5月22日登校日の朝の検温

(姫路市立安室小学校長)

ゆく河の流れは絶えずして

尾崎 文明

教育学部理科 1974 (昭和49) 年卒

「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」(方丈記)「八重むぐら しげれる宿の さびしきに 人こそ見えね 秋は来にけり」(拾遺和歌集)～ 言いようのないほどの無常観が漂っています。

♪いつか君と行った映画がまた来る……僕は無精ヒゲと髪を伸ばして 学生集会へも時々出かけた 就職が決まって髪を切って来た時 もう若くないさと君に言い訳したね……「いちご白書」をもう一度～当時のベストヒットとなった名曲である。なぜ髪を切ったことの言い訳をしなければならないのか、今はピンとこないだろう。大学闘争を描いた「いちご白書」(Strawberry Statement)を三宮の映画館で観た記憶が蘇る。今から50年前、神戸大学学生時代のことである。私は若くして逝った作家高橋和巳が好きだった。むさぼるように多くの著作を読んだ。「我が心は石にあらず」「悲の器」「憂鬱なる党派」「邪宗門」やエッセイ集など、また「されど我が日々」(柴田翔)「どくとるマンボウ青春記」(北杜夫)なども印象深い。

高知県の公立中学校に37年間勤務した。講師2年、教諭19年、教頭8年、校長8年を経験し、60歳で定年退職した。子どもたちとの限りない想い出、

言葉に尽くせないくらいの財産となっている。教育現場だけでなく、労働運動(日教組)にも深く関わり、裁判闘争も経験することができた。その時にお世話になった藤原充子弁護士が神戸大学の先輩だったことも感慨深い。

退職と同時に八ヶ岳に山荘を建て、いまは八ヶ岳(山梨県北杜市)1/3、高知2/3の生活を続けている。山荘からは甲斐駒ヶ岳、北岳、間ノ岳など南アルプスの名峰が眼前に広がっている。

「おーい、そこへ集まって記念写真を撮ろう。写っていたら全員〈優〉をやるぞ」心優しい中西先生の一言、神戸大学教育学部の山岳植物学実習の一場である。場所は何と南アルプス塩見岳の山頂(3047m)である。教育学部長を最後に退職した中西哲教授と一緒に登った名峰塩見岳、その中西先生も今は亡く遺作となった「日本の植生図鑑」を時々引っ張り出しては見ている。ミヤマシシウド、イワギキョウ、ゴゼンタチバナ、ホソバトリカブト、キノチドリなどたくさんの高山植物に出合った。お花畑の可憐な植物群落は何とも言えず、山頂近くでタカネツメクサも見かけることができた。

植物との出会いもそうであるが、美味しい一杯のコーヒーに出合った時の感動もまた格別のものがある。味と香りがバランスよくまとめられた珈琲は、芸術作品のように感じられる。「エチオピア・イルガチエフェ」～華やかな香りが素晴らしい。幸せなひとときとなり、どこまでも余韻が広がっていく。

余韻の広がりを感じる時、時間が止まってしまったかのような感覚になる。美味しい日本酒やワインに出合ったときに、何とも言えないような気持ちになるのも不思議だ。最近で言えば、「桂月純米大吟醸CEL24」、「グリド甲州白」がそうだろうか。

それは、すぐれた文学作品に接した時に感じることもある。きっと行間から滲み出てくるものに惹か



れているのだろう。「山の音」(川端康成)「悲の器」(高橋和巳)に出合った時もそうであった。文学作品に限らず「東京物語」(小津安二郎)や「波」(クールベ)を見たとき、また「交響曲第40番・41番」(モーツァルト)を聴いたときの衝撃、そして余韻、は今でも忘れられない。繰り返し接してみると、また違った味わいも出てくる。

因みに教育という場で考えてみたらどうだろうか。授業で言えば、余韻の感じられる授業ほど素晴らしいものはない。そういった授業をめざしてきたし、中間・期末テスト問題作成でもその視点で考え悩みもしたが、ずいぶんとやり甲斐を感じてきた。深く考えずに効率を優先し、保身に走るイエスマン管理職(上に弱く、下に強いのが特徴)～いまの政治状況に似ている～が幅をきかしている今の教育界、子どもたちの未来はかなり厳しい。イジメがなくなるのは当たり前のことである。子どもは大人の後ろ姿をしっかりと見ている。道徳の教科書を作ってほんとうにイジメがなくなると思っているの

だろうか……すべての事象に「原因があり結果がある」のは科学の基本の基本である。

「今朝の雲はもう居ません。その代わり風が訪れてくれます」(季節のかたみ～幸田文)～柔らかい無常観でしょうか、しっとりとしてきます。八ヶ岳と高知の交互の生活を繰り返して10年、二つの特技(アマゴ・イワナなどの渓流魚を釣ってくる、妻に美味しい珈琲を淹れる)を活かしています。

これまで子どもたちのために一所懸命頑張ってきたのだから、これからは、自分(ボクたち)中心の生き方を心がけています。高知の自宅や、八ヶ岳の山荘を訪れてくれる友人に感謝しながら、少しだけ変化のある日々を過ごしています。物質的には決して豊かではありませんが、精神的にはじつに優雅なスローライフを楽しんでいます。風の音を聴きながら、多くの趣味をいかし、信念は曲げずに生きていきたいと思います。

アメリカと日本の中で

飯島千尋

国際文化学部地域文化学科 2001(平成13)年卒

私が国際文化学部で日本文化論講座を選択したとき、その理由は「外国のことを知るにはまず自文化である日本のことを知らなければ」というものでした。ゼミでは日本人がどのように異文化に接してきたかというテーマに関心を持ち、200年前の史料の中に昔も今も変わらない人間の姿——初めて外国に着いたときの戸惑いや怖れ、言葉が通じることの安心感など——を発見したことを今でも覚えています。

さて私は今、アメリカカリフォルニア州サンタクララ、いわゆるベイエリアと呼ばれるエリアに住み、今年7歳になる息子を育てています。日本人の両親を持ち日本語を話しながらアメリカ社会に育つ息子にとって、アメリカは異文化であると同時に自文化

でもあります。いわば私は、同心円状に広がる2つの文化の間で文字通り変容(成長)していく人間を日々観察できる立場ということになります。

子どもの小さな生活範囲ですら、異文化は小さなさざ波をたてることがあります。今、息子の学校にはお弁当を持たせているのですが、ご飯のときはふりかけご飯を海苔で巻いています。あるクラスメイト(インド系と思われる)に「毎日スシを持ってきている!すごい!」と言われ、「これは魚がのっていないから違う」と頑張って説明するもなかなか納得してもらえなかったそうです。息子のなかの寿司=お魚という認識もさておき、海苔巻き弁当は「日本人=スシ」という先入観を強化してしまったのでしょうか、それとも、スシ以外の日本食を知るきつ

かけとなったでしょうか。そのクラスメイトに一度聞いてみたいものです。アメリカのランチといえはサンドイッチに丸ごとりんごや生人参というのが定番の中、日本風のお弁当を持たせることは少しだけ心配だったのですが、多少のさざ波はあっても今のところは息子自身もクラスメイトも色々あるお弁当のうちの一つ程度にとらえているようで安心しました。私もときどきはピーナツバター&ジャムのサンドイッチと鶏の唐揚げや照り焼き肉巻きをお弁当箱に入れることがあり、そんな時は日本とアメリカの折衷だなあと一人で面白がったりもしています。

歴史を振り返ってみれば、当地に本格的な日系人社会をつくったのは1880年代後半から移り住んで来た日本人移民でした。サンタクララのお隣サンノゼには、移民の歴史を学んだり直接体験を聞いたりできる日系人博物館があります。私は出産前の一時期ここでボランティアをしていたことがあるのですが、その時に聞いた話で一つ印象に残っていることがあります。

日本人移民は、当初は独身男性労働者が中心で、農場、缶詰工場等の仕事に従事していました。コミュニティが形成されるに従いキリスト教会、仏教寺院なども建てられたのですが、教会の建設は1895年、お寺は1902年でした。ではなぜ教会の方が先に建てられたのか？ 解説ボランティアさんのお話によると、それは、教会のほうが、よりアメリカ社会に受け入れられやすかったためだそうです。黄禍論によって移民排斥の声が高まるなか、様々な差別的扱いや圧力を経験しながらも、一世たちはアメリカに定着しようとしていたのです。

1900年代後半以降、結婚によって多くの日本人女性が渡航、「二世」が誕生してコミュニティの中心は家族へと移りました。日系人子女たちは、各地に設立された日本語学校で「継承語」として日本語を学びながら、市民としてアメリカの公教育をうけました。日本語が世代間の意思疎通言語である一方、子ども同士では英語で話すというケースも多かったそうです。

1930年代ごろには多くの一世代が農業、牧畜等で成功し、日系人社会も経済的な安定を迎えます。し

かし、1941年の日米開戦に続いて出された大統領令により、カリフォルニアを含むアメリカ西海岸全域とハワイの一部の日本人、日系人約12万人は強制的に立ち退きを命ぜられ、内陸の砂漠地帯や僻地に設けられた強制収容所に送られることとなります。（サンノゼ日系人博物館には収容所のバラックが再現されており、実際に使われていた家具なども見学することができます。）この強制収容を通して、日本人、日系人のなかでは米国政府への怒りや失望を抱く者、逆に忠誠を誓う者など立場や考え方の違いが顕在化し、コミュニティのなかで、また家族の間ですら多くの混乱と葛藤を招くこととなりました。

戦後、収容所を出た人々は財産や土地を失いながらも生活基盤を立て直し、今日ではたくさんの日系三世、四世たちが活躍しています。現在私たちは、日本人だからという理由で土地を買えなかったり、学校に行けない、というようなこともなく、もちろん収容所に追われることもなく、幸いにも社会的経済的に安定した生活を享受しています。今日に至るまでの先人たちの苦勞と努力、忍耐には敬意を表すしかありません。

このような環境で育つ息子にとって、日本語や日本文化はどのような意味をもっているのでしょうか。

話し言葉や身振り手振りはだんだんアメリカ流になりつつあり、日本人のお友達と遊んでいてもいつの間にかお互い英語になっていたり、一人遊びも端で聞いていると英語のことが多いようです。テレビなら見るかもと誘ってみても興味があるのは英語の番組、「たたかいごっこ」が好きなら空手か剣道はどう？と水を向けてみるも一蹴。学校を除けば唯一、絵本の読み聞かせだけが完全に日本語の時間となっています。

とはいえ、週一回の日本語学校ではお勉強だけでなく、折にふれ日本の行事や習慣を体験させてもらっていますし、級友たちとも（もちろん日本語を使って）楽しく遊んでいます。特に折り紙はブームで、家で作るだけでなく折り紙セットを公園に持って行っっては、簡単な紙飛行機や紙コップを現地の友

達と作って遊んでいます。私も、カブトムシや手裏剣をずいぶん作られました。食生活の面でも、海苔巻きはもちろんうどん、お団子等の食材は欠かせません。これからも、色々な面で米国文化を吸収していくでしょうが、日常生活でおもしろいと感じた経験や身についた習慣、食べ物の記憶は残るでしょう。

日本人先輩ママさん方のお話を聞いていると、日本語学校に通っていても、小学校高学年から中学生ぐらいになると漢字が難しくなったり現地校の勉強やクラブ活動が忙しくなったりでリタイアする子が多いそうです。我が家も、現地校は毎日喜んで通っていますが、すでに日本語学校の勉強は好きではないと言っています。言語の面で英語優勢になっていくことについては親としては寂しい気持ちになります。

が、子ども時代に蓄積した思い出や習慣のあれこれ、少しの日本語とともに残ってくれるのであればよしとして、できるだけ本人の興味に任せて見守っていくつもりです。

今後、現地校で過ごすなかで、先に触れた日系人の歴史、また真珠湾攻撃、原爆のことも学ぶことになり、クラスでただ一人（もしくはごく少数）の日本人として意見を求められることもあるかもしれません。その時には、日本人だからアメリカ人だから一方の見方に肩入れするのではなく、一人の人間として意見を言えるようになってほしいと思います。そして、将来日米どちらのパスポートを使おうかと考えることはあっても、どちらの国に忠誠を誓って戦うかを選択させるようなことは二度とない社会であることを願っています。



移民の歴史を伝えるサンノゼ日系人博物館



日本語学校幼稚部にて参観日に

文理融合、資料デジタル化の潮流のなかの歴史学研究—「紙」から

徐 小 潔

総合人間科学研究科後期課程 2005（平成17）年卒

大学院時代の私の研究分野は日本近代史でした。いつもあちらこちらの図書館や資料館に出かけ、資料を手を持ち、文字から読み取った内容を分析し、歴史の記述を試みました。文字資料以外に、近年、音声・映像・画像（地図・写真・絵画）なども歴史資料として研究されるようになり、歴史研究の手法が多様化しています。さらに、二つの言葉が2000

年代以降からしばしば歴史研究に登場し、新たな潮流が形成されるようになりました。「資料のデジタル化」と「文理融合」です。

「資料のデジタル化」によって、実物を手に取る必要がなかったり、あるいは資料保存などの理由で現物が見れなかったりすることも増えています。キーワードを入力すれば、以前のように資料館・図

書館に出かけなくても、自宅で資料を読むことができる便利な世の中になりました。しかし、いつも資料を手を持って、資料から伝わってくる重厚さを感じながら文字を読んできた私には、物足りないところがあります。

また、「文理融合」は日本政府が掲げる教育研究方針で、文部科学省による大学改革の目玉の一つともいえます。

私は2015年から東洋文庫という研究図書館で勤めるようになり、この二つの潮流に巻き込まれて、高精細デジタル顕微鏡による紙質の調査研究を始めました。もともと理系好きだったため、顕微鏡を操作するには抵抗感もなく、目から鱗が落ちる思いでミクロの世界に没頭しました。

そうするうちに、なぜデジタル化された資料を読むのに物足りなさを感じるのかが分かりました。手で触れる紙の感触も「歴史資料」の一部であるからです。紙に触れたときの感じは、確実ではないにせよ我々に文字以外の情報をすこしもたらしめます。

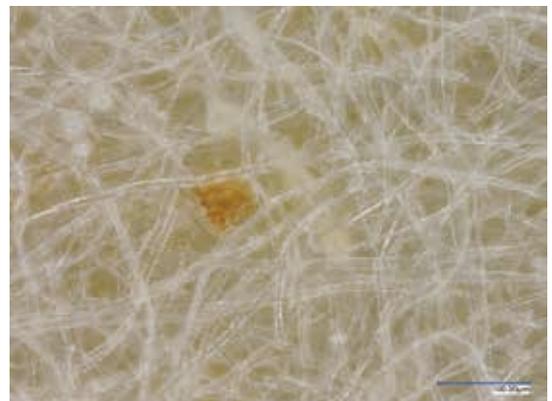
紙は植物などの繊維を薄く平らに絡ませて、膠着させています。19世紀までの東アジアの紙は植物を主に使いますが、西洋の紙はぼろ布を主な原料として製造されていました。さらに、用いる植物によって紙の種類や質に差が出てきます。また、植生の地域差もあるため、紙を観察することによって、書物が印刷された年代、地域、書物の格など様々な情報を得ることが可能となります。いつ、どこで、だれが、なんのために作った書物なのか、文字情報から分かるものもありますが、そうではないものも実は多いのです。

私はこれまでに、東洋文庫所蔵の西洋古典籍や漢籍を調査してきました。16～18世紀の西洋

書籍に用いられている紙から、原料が純粋なぼろ布ではなく、植物で作られたあるいは植物が混合されていた紙が見つかりました。当時は植物を原料とする紙の製造はヨーロッパではできなかったといわれていますので、東西貿易あるいは製紙技術の伝播にかかわる新たな知見が期待されます。格式の高い漢籍のなかでも、実は思ったように質の高い紙を使っていないものもあり、資料が制作された当時の背景を改めて考えさせられます。

伝統的な紙質の調査方法は、化学試薬によって繊維を染色する過程があり、資料からサンプルを採取する必要があるため、ほとんどの歴史資料に使われている紙は調査できないままです。最新のデジタル顕微鏡によって紙質の非破壊調査ができ、その時代に関する新たな歴史発見も期待されます。そして、資料の文字情報をデジタル化すると同時に、そこに紙質のデータも附せば、現物を手に取ることができなくても、資料が書写、印刷された背景に関する物質的な情報を得られます。

現在、この手法は近代以前の歴史資料に有効であり、産業革命以降になると機械による製紙が主になってくるため、紙からどのように近代史を読み解くのかはこれからの課題です。製紙工業化は地域によってそれぞれであり、植民地支配との関係もすくなくありません。そこからみる「近代史」はどんな風景なのか楽しみです。私たちの身近にある「紙」は、まさに歴史の秘蔵庫です。



中国の宣紙（×500倍）

調査室にて

一人ひとりの生き様を見つめて —歴史研究での学びと介護の現場—

山本 かえ子

国際文化学部地域文化学科 2002 (平成14) 年卒

私は、公益財団法人神戸YWCAの下にある訪問介護事業所神戸YWCAまごの手で、管理者兼サービス提供責任者をしております。ホームヘルパー(訪問介護員)の手配をしたりケアマネジャー等への連絡を行ったりしながら、介護が必要な高齢の方や障がいのある方々の日々の生活を支えています。昨今の新型コロナウイルス感染拡大状況の中でも、ホームヘルパーはエッセンシャルワーカーとして、働き続けています。

私は、大学では日本近現代史を学び、1910年代から1940年代における市井の人々の平和運動の様子や、そこに関わった人々の意識について、神戸の古本屋主人の日記資料等をもとに考察しました。学んでいる中で、私が一貫して気になっていたのは、歴史を語るときにこぼれ落ちていく、同時代を生きる一人ひとりの生き様についてでした。そのすべての生き様を歴史に反映していくことは不可能ですが、少しでも多く取り上げて歴史の語りを豊かにしていきたいと考えていました。大学では史料等を通じて過去の人々の生き様を見てきましたが、現在は介護の仕事を通じて、高齢者一人ひとりの生き様に触れ、一人ひとりがその人らしい生き方をできる限り長く続けられるよう、取り組んでいます。

現在は事務所内での仕事が多くなりましたが、ホームヘルパーとして現場に出ていく中で、様々な利用者の語りに触れることができました。ある90代の男性は、敗戦後大阪の街なかで労働しているとき、先輩からヒロポンのことを教えられ、何度か打った話をしてくれました。90代女性は、若い頃子育てで布オムツを使っていたが、冬に川でオムツを洗濯して干したら凍ってしまった話を教えてくれました。訪問介護の所要時間は細切れで、ヘルパー業務をしながらなのでゆっくり聞くことは叶いませんが、時間の許す限り聞かせてもらっています。利

用者の生活環境も様々で、長年暮らし続けている家やそのインテリアが時代の流れや様相を語ってくれることもあります。利用者やその生活環境はまさに十人十色で、好奇心をそえられることこの上ありません。

介護の仕事は、身体介護はまだしも、家事を行う生活援助は「誰でもできる」と捉えられ、看護師やリハビリ職等に比べて専門性があまり評価されない側面があります。しかし、ホームヘルパーは定期的に家の中に入って仕事を行うため、他の職種よりも身近に利用者の様子を観察することができ、情報を得やすい立場の仕事です。利用者の変化に気づけるよう、知識や経験を積み、想像力や観察力を鍛える必要があります。それに、生活していく中で起きることは、「何でもあり」です。私たちの事業所がある神戸市中央区は、独居高齢者の数が他の区に比べて多く、天涯孤独の状態の方や、困窮している方も多く住んでいます。そんな利用者の身近な存在として、ホームヘルパーは様々な相談を受けます。ホームヘルパーは利用者から話を聞き、発信してケアマネジャーをはじめとする他職種と連携をしていくコミュニケーション力が必要となります。できなくなってきた哀しみ、死への恐れを感じている利用者に寄り添う共感力も求められます。

訪問介護は、介護保険サービスでも比較的最初に利用するサービス、言ってみれば「介護保険サービス利用の入口」になることが多いです。住み慣れた街や住居で暮らし続けることができるため、利用者にとっては身体的・精神的負担が少なくてすむのですが、介護事業所にとっては、利用者1人につき1人を派遣しないといけないため人件費もそれなりにかかり、移動が伴うので1日の訪問件数も限られてしまうという非効率さがあります。急な入院等で利用が休止すると仕事がなくなるため、運営も不安定

です。そのためか、訪問介護事業所は、小規模な事業所が数多く存在する状態だときいています。

昨今はこれに加えて、ホームヘルパーの高齢化が深刻になっています。2019年4月に全労連が公表した調査結果では、ホームヘルパーの平均年齢は55.5歳で、50歳以上が全体の73%を占め、60歳以上が37.7%と4割に迫っている状況だということです。逆に20代は1%しかおらず、30代を含めても7%しかいないそうです。訪問介護の利用者はここ10年で増加しているにもかかわらず、2019年度のホームヘルパーの有効求人倍率は15倍。施設の介護職のそれは4.3倍であり、介護業界の人手不足といわれる中で、特に高くなっています（産経bizの2020年9月29日記事）。少しでも多くの利用

者が在宅で自分らしい生活が続けられるよう、ホームヘルパーの仲間が増えることを、現場の一員として願ってやみません。



職場の仲間といっしょに

神大発の「笑い」を六甲祭に

山本 望

国際人間科学部グローバル文化学科 2回生

紫陽会会員の皆様、国際人間科学部グローバル文化学科2回生の山本望と申します。今回、私がこの大学を志すきっかけとなった神戸大学出身の漫才師ネイビーズアフロの魅力について書かせていただきます。

振り返れば、出会いはあの時でした。高1の冬、私は地元新聞社主催の千原せいじさんのトークショーに来ていました。テレビ番組でアフリカ大陸をはじめ世界各地を飛び回る千原せいじさんから何かしらの刺激をいただけるのではないかと母から勧められたからです。当時の私は、大学進学を考えないといけない時期になっているにも関わらず、将来に具体的に目指すものが見つけられずにいました。その勧められるがまま参加したそのトークショーの前説を務めていたのがネイビーズアフロでした。2人が繰り広げるテンポ良い漫才に、私は引き込まれていきました。母の期待とはまた別の形で、確かにその時に私は刺激を受けることができたのです。その出会いから、なんとか2人に近づきたいと、私の

神戸大学進学計画が始まりました。六甲祭実行委員に入り、六甲祭にネイビーズアフロを呼ぼうと思ったのです。

ネイビーズアフロは神戸大学出身、吉本興業所属の漫才コンビです。2人は京都の進学校である堀川高校からの同級生で、ツッコミのはじりさんは工学部、ボケのみながわさんは当時の発達科学部（現国際人間科学部）出身です。鶴甲第1キャンパスの食堂でみながわさんがはじりさんをお笑いに誘い、漫才師としての活動を開始しました。第50回NHK上方漫才コンテストで優勝、第56回上方漫才大賞新人賞を受賞するなど輝かしい成績を収めています。最近では夕方の情報番組にもコーナーを持ち、クイズ番組にも出演していることから、既にご存知の方もおられるのではないのでしょうか。

ネイビーズアフロの最大の魅力は掛け合い漫才。細かくて鼻につくみながわさんのボケと、お客さんの気持ちを代弁するはじりさんのツッコミが繰り広げるテンポの良い掛け合いが特徴です。またボケ

とツッコミにとらわれない、Wボケの漫才もあり、様々な形の漫才をできるところも彼らの強みだと思います。

そしてもう1つの魅力は、お笑いに対するストイックさです。東京で隔月、大阪で毎月単独ライブを行いそこで新しいネタを下ろしています。このような頻度で単独ライブを行っているコンビはなかなかいないと思います。また、みながわさんはTikTokで「#別の人の彼女になりたいよ」シリーズをはじめとする動画を毎日投稿し、フォロワーは

14万人を突破しています。実力派漫才師のネイビーズアフロ、これからも活躍すること間違いありません。さて、六甲祭実行委員2年目の私はコロナ禍で未だリモート生活を送っています。ネイビーズアフロは私が高3の模試に追われている時期に六甲祭に出演されました。私はこの目でネイビーズアフロが六甲祭に出演しているところを見ていません。私が在学している間になんとしてもネイビーズアフロの漫才を六甲祭で見たいと未だ企み続けています。

新しい時代へ

神戸支部支部長 脇 善 昭

教育学部理科 1986（昭和61）年卒

令和3年9月1日現在、兵庫県に緊急事態宣言が発令中である。9月12日までということなのだが、延長されるかもしれない…。延長されると、体育大会（9月）、3年修学旅行（10月上旬）、文化発表会（10月下旬）、2年野外活動・トライやる・ウィーク（11月上旬）の実施時期や方法を調整しなければならない。また、運動部の公式戦も中止や延期になっている種目がほとんどである。どの行事も子供たちの成長過程でとても大きな意義を持つものである。

このような状況の中でも、我々教職員は、「できない、中止にしよう」と発言するものはほとんどいない。「どうやったら形を変えてでも、実施できるだろうか？」と色々アイデアを出しながら、行事の準備を進めている。今まで当たり前であった『例年通り』というワードは、ほとんど聞こえなくなった。

さらに、「働き方改革」「業務改善」「GIGAスクール構想」「オンライン授業の取組」「部活動の外部委託」「コミュニティスクールの発足」「PTA改革」等、今の学校現場は、様々な分岐点にぶち当たっている。この大きな波を乗り切っていくために、ベテラン教員の経験値と若い教員のICT技術等を融合させていくことが必要であり、そのマネジメント能力

が管理職に求められている。さらに、地域や保護者と双方向の意見交換を行い、地域の中に根付く学校にしていきたい。

そのために、「学校HP」が必要不可欠な存在となっている。子供たちの頑張っている様子や行事の様子等を地域・保護者にできるだけ発信し、開かれた学校を目指している。また、HPをご覧になっていただいている方から建設的な意見を聞き出すこともできる。

また、学校と家庭をつなぐ「すぐーる」というメー



ル配信ソフトを利用することにより、警報等により緊急に家庭連絡する場合や部活動の解散時刻等が簡単にできるようになった。また、「タブレットドリル」「みんなの学習クラブ」「SKY MENU」といったICT教育ソフトの導入も進んでいる。こういった機能を十分に使いこなし、子供や保護者にしっかりと還元していくためにも、若い教員の新しい力が必要となる。そして、教育のプロ集団として厳しく高め合う関係を構築し、自分の授業は、いつ誰に見られても大丈夫だという教員を要請するためにも、研修が不可欠となっている。

本校の校長室に飾られている「書」で「至誠一貫」と書いてある（右から読む）。意味は「最後まで誠意を貫き通すこと、きわめて誠実なこと。一つの方針・方法・態度で、初めから終わりまで貫き通すこと。真心をもって何事にも立ち向かうこと。」である。



こんな時代であるからこそ身に染みる言葉である。

かつて教員だった文部科学省大臣官房総務課長の浅田和伸氏は次のように言われている。

「日本の教育、特に義務教育は決して間違っていない。素晴らしい国民を育ててきた。教員の仕事は大変だ。重要な仕事だからこそ重い責任が伴う。子供たちの将来も日本の将来も『教育』にかかっている。」

この言葉を肝に銘じながら、この職を全うしたい。
(神戸市立広陵中学校長)

義務教育学校港島学園での5年間

柳田 竜一

教育学部初等科 1984（昭和59）年卒

1. はじめに

平成28年3月、神戸市教育委員会 指導部人権教育課（現学校教育課）で首席指導主事をしていた私に、当時の教育長から「この4月から新しく開校する義務教育学校港島学園の校長になってほしい」と告げられました。委員会で3年が終わり、そろそろ現場に戻してくれるかなと思っていたのですが、港島にも義務教育学校の事にも、ほぼ関わっていませんでしたので、正直「なんで私？」という気持ちでした。翌日の内示から、港島中学の校長や共に赴任する管理職、事務局の担当者と約1週間の打合せの後、校長として赴任しました。神戸初の義務教育学校の立ち上げ、そして当時の港島には地域との大きな課題を抱えていましたので、不安の中での出発となりました。

2. 港島学園の誕生

港島小・中学校は、昭和55年人工島ポートアイ

ランドの街びらきと同時に開校しました。当時より港島地区では「街づくりは人づくりから」という理念のもと、地域の方々の手によって学校を核にした街づくり、特色ある取組が積み重ねられていました。同じ敷地内で隣接する小中学校なので、連携した多くの教育活動が行われていました。平成27年



港島学園全景

6月学校教育法が一部改正され、義務教育学校が新たな学校種として認められ、平成28年4月、全国で始まった22校の義務教育学校の一つとして開校しました。

初めての職員会議では、総勢70名ほどの教職員が集まりました。その年は全教職員の4分の1ほどが入れ替わった大きな異動でしたが、特に管理職4名（校長・総括副校長・小中学部各教頭）が2年連続の総替わりとなり、元々いた教職員は期待よりも不安が大きかったように見受けられました。そのような中で私は、「今日から港島学園は一つの学校です、我々は一つのチームです。まず同じ学校の教職員だという意識を持ちましょう。そして1年生から9年生の児童生徒はすべて自分の学校の子供たちと思い、全員で関わっていきましょう。」というお話をさせてもらい「チーム港島」としてスタートしました。

3. 港島学園での実践

1年目は、課題である地域との関係にかなりの時間を費やしました。多くの方々力を借りながら、なんとか良い方向に進み、2年目からはこの件で時間を費やすことがほぼなくなりました。反面、1年目には義務教育学校としての実践をあまり進めることはできませんでした。また、小中連携の大きな課題とされている「小中の文化の壁（この言葉を使っている以上、小中連携を進めていくことはできないと思い、私は使わなかった言葉ですが）」といわれるものを解消するには対面での会話しかないと思っていましたが、施設は以前の小中学校をそのまま使っていたので、小中お互いの先生方の行き来に5分ほどの時間がかかり、先生方が顔を合わせての話し合い等が月1回程度の合同会議でしか持てませんでした。それ以外の個々の連携は、勤務時間後に行う状態でした。そこで各行事後や時候の親睦の会を積極的に開いたりすることで、少しずつその課題解決を図っていました。

5年の間には小中一貫教育ならではの取組を行っていきましたが、正直試行錯誤の連続でした。毎年教職員の教育反省や保護者アンケートを行いながら少しずつ改良を重ねていきました。そうした経緯の

中、今まで行ってきた特徴ある取組をいくつか紹介します。

まずは「共動授業」です。これは5・6年生に中学部教員が乗り入れ、小学部の担任とともに行う授業です。算数（6年全時間、中学部数学教師が主担当）・理科（5・6年週1時間、中学部理科教師が実験等をサポート）・英語（5・6年週1時間、中学部英語教師が主担当）で行っています。将来的には小学部の教科担任制をうまく取り入れながら行っていきたいと考えています。つぎに小学校の英語活動です。開校当時から1年生から6年まで英語活動を実施していました。この5年の間に高学年では英語や外国語の時間ができましたが、少し先取りができたように思います。また共動授業が時間割上に明記した授業に対し、小中教員の特性を生かした単発の出前授業「ゆに授業（名前はユニット、ユニバーサルの意味から取っています）」です。中学部の陸上専門の体育教師が、小学部の陸上の授業時に参加し指導したり、中学部の社会科教師が6年生の歴史の授業の一部を受け持ったりします。またコロナ禍で実施できなかったですが、道德の得意な小学部教員が中学生の道德を行ったりするものです。より専門的な立場から興味付けができるように思います。そして、小中合同で運動会や文化発表会の開催、月1回の学園朝集、始業式・終業式、避難訓練などを合同で実施しています。特に運動会では1年生から9年生までが、互いの成長を感じながら盛り上がる姿は圧巻です。その他、5・6年生の希望者が中学部の部活動に参加（月2回程度）、合同の児



小中合同の運動会

童会・生徒会活動（小中合同リーダー研修，いじめ防止小中連携会議など），特別支援学級の月1回の小中交流活動，小中の「異学年コラボ授業」（9年生が4年生の算数の授業に入りマンツーマンで教える授業，7年生が総合学習で学んだ構成的エンカウンターを5年生に行う授業等），合同職員会・研修会の定期開催，教員の宿泊行事参加（8年野外活動，5年自然学校に小中の教員が参加）を行ってきました。これらは今後も改良を重ねより良い小中一貫教育を目指していくことと思います。

4. まとめと今後の展望

1年目から重視していたことに「保護者アンケート」があります。年間2回行い，実施後には課題等の検証，今後の具体的な取組を示し，HP等で発信してきました。項目の中に「学校が保護者の意見を取り入れた教育活動を行っている」という項目があります。1年目に実施した初めてのアンケートでは，その項目の満足度は59.0%と，全項目の中で最低でした。その後徐々に上昇し，5年目には84.3%になりました。この項目は保護者の方々の学校への信頼度だと考えています。まだまだ満足した数字はないですが，地道な教育活動が，保護者に認められてきているように感じました。また，港島学園に赴任以来，委員会に申し出ていた「一体型校舎」への動

きがよいよ本格化し，現在基本設計が進んでいます。数年後にはそれが出来上がる予定です。その時にはまた新たな港島学園のスタートとなり，さらなる発展に期待しています。

5. おわりに

今年3月31日定年退職を迎え，37年間の教員生活にピリオドを打ちました。昨年度は，港島学園の校長として，また神戸市や兵庫県の中学校長会のお仕事もさせていただいていましたので，教師生活の集大成と意気込んでいました。しかし，新型コロナウイルス感染症の為，様々な出来事に追い立てられその場その場をこなしていくことに終始した，というのが実感でした。ただそうした中でもやってこられたのは，それまでの教員生活も含めて，同僚，先輩，後輩の教職員や保護者，地域の方々そして子供たちに恵まれていたからだと思っています。本当に感謝しかないです。4月からは神戸市教育委員会再任用短時間勤務をさせていただいています。今まで数々のご恩に対し，少しでもそのお返しができるばとの思いで勤めていきたいと思っています。

紫陽会の皆様方の今後のご活躍，そしてご多幸，ご健勝を深くお祈り申し上げます。

（前 神戸市立港島学園校長）

教員の働き方を見直して…

西山 令

教育学部特殊教育科 1984（昭和59）年卒

2020年3月に始まった「コロナによる休校」。学校が再開してからもたびたび発出される「緊急事態宣言」。それに伴って学校現場も大幅に活動を制限されてきた。最初は目に見えての影響は感じなかったが，徐々に子供たちや保護者の不安や不満がつのりつつあるのを肌で感じるようになった。

2021年9月。第5波の真ただ中で始まった令和3年度2学期。感染の不安を訴え登校できない児童も増え，「オンラインを利用した学習支援」等「学

びを保障」する取り組みにかなりの労力を費やした。昨年度から導入された外国語やプログラミング等，学校に求められるものが増える一方で，教員の働き方を見直していくという取り組みにも着手していかなければならない。また，ここ数年「保護者対応」に膨大なエネルギーを使わざるを得ない事案も増加するばかりである。もちろん，学校運営に協力的な保護者，正当な意見をくださる保護者が大半ではあるが，わずか1%に満たない常軌を逸した保護

者の対応に99%の労力を使っているといっても過言ではない。

そんな中でも、日々奮闘している教職員の心身の健康を守っていくのも管理職の大きな仕事である。

「コロナ禍」以前から「やめる・へらす・かえる」という改革を行い、教員の働き方を見直す取り組みは始まっていた。私も「枝葉を切り落として幹を太くする」という考えで改革を推進してきた。マンネリ化した行事等の削減、会議のペーパーレス化などの学校においてもここ数年で定着してきたと思われる。ただ、大きな障壁は「教員自身が自分の働き方を見直そうという意識に乏しい」ということだ。特に時間の感覚がマヒしてしまっているように感じた。

そこで「パーキンソンの法則」（仕事の量は完成のために与えられた時間をすべて満たすまで膨張する）を利用し、会議終了時刻の設定をすることや個人が退勤時刻の設定を行うことに取り組んだ。

職員会議やその他の部会等は1時間以内。もちろん勤務時間内で終了する。また、本校では職員室前

の黒板の隅に個人が退勤目標時刻を貼り、退勤時にはがして帰るという取組を行っている。この取組は、一人の職員からの提案で、決して強制しないという条件付きで行っている。取組を始めて、明らかに退勤時刻が早くなった。

時間があるとその分集中力を欠いてしまう。また時間に余裕があると仕事に取りかかるまでが遅くなってしまふ。このようなことを防ぎ、時間を意識することで自ら優先順位をつけ、効率的に仕事ができるように取り組んだ。



これは「働き方改革」の一例に過ぎないが、小さなことから積み重ねていくことが大切なのではないだろうか。本当に大切な「子供たちと真剣に向き合う時間」を確保することは、今後の公教育の命運を握っているようにすら感じられる。

(神戸市立小部東小学校長)

先輩からのメッセージ

KU-Net (神戸大学コミュニティネットワーク) に各学部の先輩たちから後輩たちに温かいエールを贈るコーナーができました。そこに掲載された発達科学部と国際文化学部卒業生からのメッセージです。

小杉美和

発達科学部 2010 (平成22) 年卒

■ 学生時代に興味があったこと

中学生のころから青年海外協力隊に興味があり、開発途上国へ行ってみたいという気持ちを強くもつようになりました。大学生活では、国際参加プロジェクトで、フィリピンへ行きました。個人的な旅行でも、多くの国を訪れました。それぞれの国の事情を知ったり、その国の人々とかかわったりすることが、本当に楽しかったのを覚えています。今まで知らなかった世界が大きく広がるような気がして、外国にどんどん魅了されていきました。

今では、外国のことについて子どもたちの前で話

す機会も多く、当時は少々無理をしてでも行ってよかったと振り返ります。やはり子どもたちも自分たちの知らない世界の話は興味深いのか、楽しそうに話を聞いています。

■ 仕事の面白い部分、難しい部分

私は小学校教員ですが、やはり大切なのは授業です。授業中の子どもたちの反応を予想しながら準備をします。授業の中で、予想以上に子どもたちの心に届く場合もありますし、その反対もあります。しかし、その都度、目の前の子どもたちの様子に合わせて発問を変えたり、活動内容を変えたりしながら臨機応変に授業をしていくのが面白いです。子ども

たちが目を輝かせて授業に向き合っている時は、やりがいを感じます。

難しい部分は、自分のための時間の確保です。教員は子どもたちに負けないエネルギーをもっている必要があります。そのためには、ライフワークバランスや自分のアップデートを大切にしなければなりません。しかし、日々の中で、それが時々難しいと感じます。ライフワークバランスがとれると、また新しい1週間を笑顔で始められます。先生の笑顔は、子どもたちにとって、とても大切だと実感しています。

■ 在学生の方へ

現在は、様々な面で制約されることが多いかもしれません。しかし、なるべく様々な分野について広く体験したり、様々な人とふれあったり、知見を増やしたりすることが、今後役に立ってくることと思います。

「人生は選択の連続」。私は、この言葉を頭の隅に置いてあります。何かをするとき、人は必ず選択をします。そのときに、自分の中に少しでもヒントとなる引き出しがあると、前向きな決断ができると信じています。その引き出しは、様々な自分自身の経験から成るものです。だから、在学生のみなさんには、たくさんの経験を積んでいただきたいです。同じ神大生として、応援しています。

(公立小学校勤務)

三宅 洸太郎

国際文化学研究科 2016(平成28)年修了

クラシック音楽や美術、アートに興味・関心があり、そうした芸術文化を取り巻く政策や社会、経済活動を、学部から修士にかけて専門分野として学びました。大学が六甲にあるという立地ゆえのフットワークを活かしてコンサートホールや美術館・博物館など文化施設には可能な限り足を運びましたが、学生の特権である「学生券」を活用しながら比較的安価で様々な作品を観たのは良い思い出です。また、

学部3年から4年にかけてはドイツ・ハンブルクに交換留学しましたが、ゼミや授業と並行して1年間で観た舞台の数は150公演以上。その後も大学院修了まで毎年1ヶ月ほどドイツに研修滞在させていただきましたが、神戸大学には「好きなことを好きなだけ」させていただける風土があり、また友人や先生方、事務の方々含めそれを認めてくださる環境があったことは本当に感謝しています。

学生時代の経験をそのまま活かしたいという思いから就活を行い、今の仕事を選びました。学生時代からゼミでコンサートの運営をしたり、文化施設の中を見せていただいたりした経験が直接的に生きることも多く、例えばこれまでも伝統芸能の方々や美術館、オーケストラと仕事をする機会があり、プロの方々を作り上げていく現場に面白さを感じています。また、今はコロナ禍、イベント業界にも厳しい風が吹いていますが、それでもイベントを終えた後、老若男女問わずお客様が良い表情で帰路につかれる姿を見ると、苦労や難しさが癒されます。

よく言われることかもしれませんが、働き始めると自分の時間がなくなり好きなことをする余裕もなくなります。その意味で、大学生活は自分の好きなことを思い切ってできる“最後の時間”かもしれません。しかし、責任はともなうものの「自由」な立場で考え動くことは難しさも伴いますし、就活が近づくにつれて将来への不安も生まれていくと思います。(特にコロナ禍、授業や様々な活動を含めて、数年前とは全く違う「学生生活」だと思っています。)

ただ、私自身の経験ではありますが、例えば留学中の出会いや経験はそれまでの価値観や考え方を大きく変えて今の自分の“基礎”へと繋がっていますし、神戸大学での先輩後輩を含めた友人関係は、実際に会うことは少なくなったもののSNSを通じて続き、今も密かに多くの刺激をもらっています。すべてが将来につながる「今」を大切に、限られた時間を有効に使ってください。

(放送局勤務)

2021年度 評議員会（書面表決）報告

8月7日（土）に開催予定でした評議員会は、新型コロナウイルスの感染拡大の状況を考慮し、7月上旬の本部役員会で中止を決定しました。議決承認事項については、昨年同様書面表決手続きにより審議していただくこととしました。8月上旬に幹事、評議員等の議決権者116名に書面表決用評議員会資料を送付し、8月末の期限までに75名の返信をいただきました。その結果、75名全員の方から本部提案の

- ①2020年度 事業・会計決算報告
会計監査報告
- ②2021年度 役員組織（案）
- ③2021年度 事業計画・会計予算（案）

について承認をいただきました。ご審議いただいた皆

様にあらためてお礼申し上げます。

付帯意見として、

1. 書面表決書の捺印の必要性について
2. 評議員会の開催時期の変更について

2点をお聞きしました。次年度に向けて本部役員会で検討していきたいと思っております。

2021年度の事業計画・予算執行については、従前より会費納入率の低下が危惧されていますが、それに重ねてのコロナウイルス禍もあり、さらに収入の低下が予想されます。今後も収入に応じた支出の見直しを行いながら、学生支援と同窓生の連携を柱にした事業を行ってまいります。ご理解、ご協力よろしくお願いたします。

2020年度 事業報告 (大学関係行事・活動を含む)

2020年

4月3日（金）	神戸大学入学式中止
6日（月）	学部ガイダンス中止 祝詞と記念ファイルを贈る。
下旬	教育実習前実習講座7月以降に延期
5月5日（火）	～6月5日（金） 新型コロナウイルス感染拡大防止のため事務局閉鎖
6月6日（土）	役員会 会誌編集会議①
10日（水）	会計監査会
20日（土）	幹事会
7月上旬	評議員会中止決定 書面表決作業開始 教育実習事前実習講義 (6講座オンデマンド形式)
下旬	
8月6日（木）	会誌編集会議②
8日（土）	評議員会 中止
24日（月）	学部との卒業祝賀関係事業検討会①
10月5日（月）	会誌編集会議③
31日（土）	ホームカミングデー中止
11月	神戸大学「六甲祭」中止 紫陽会神戸支部総会中止
12月10日（木）	会誌「紫陽会」第1号発刊

2021年

1月15日（金）	学部との卒業祝賀関係事業検討会②
2月	紫陽会大阪支部総会中止 姫路支部総会中止 新会員名簿発刊
3月10日（水）	学部との卒業祝賀関係事業検討会③
25日（木）	神戸大学卒業式 学位記授与式 紫陽会から卒業祝品を贈呈

2021年度 事業計画 (大学関係行事・活動を含む)

2021年

4月6日（火）	神戸大学入学式 学部ガイダンス (会長オンラインメッセージ)
16日（金）	～23日（金） 教育実習事前実習講座（8講座） 役員会①
24日（土）	役員・評議員名簿確認作業
5月	幹事会 中止
6月	会誌編集会議①
16日（水）	会計監査会
7月7日（水）	役員会②（評議員会中止決定）
10日（土）	会誌編集会議②
8月2日（月）	学部長・事務部長との懇談
10日（火）	評議員会書面表決資料発送
27日（金）	同 書面表決により承認
9月18日（土）	役員会③ 会議編集会議③
30日（木）	紫陽会賞授与 和田彩氏
10月8日（金）	同 戸田紘氏
11日（月）	会誌編集会議④
30日（土）	第15回ホームカミングデー（Webによる開催）
11月13日（土）、14日（日）	六甲祭（オンライン開催）
12月10日（金）	会誌「紫陽会」2号発刊
下旬	役員会④・学部支援基金委員会

2022年

1月上旬	新年学部訪問（学部長との懇談）
2月中旬	新会員名簿発刊
3月下旬	新入生オリエンテーション
3月25日（金）	神戸大学卒業式・学位記授与式

※紫陽会各支部総会のほとんどは中止または延期となっています。

会員の皆様のご協力・ご支援を

1989年（平成元年）3月までにご卒業・ご修了の皆様方へ

特別維持会費納入のお願い

神戸大学が国立大学法人へ衣替えして以降、大学運営にかかわる予算が激減し、各学部とも財政面で逼迫が伝えられてきます。

紫陽会ではその都度会報で報告させていただいておりますが、毎年、大学・学部への支援を可能な範囲で行ってきました。

支援事業を継続していくためには、**ご卒業・ご修了30年目の皆様に「特別維持会費」**をお願いしてまいりました。本年は1989年（平成元年）3月までの卒業・修了の方々をお願いすることになります。

なにかとご無理申しあげますが、趣旨をご理解の上、納入にご協力いただくようお願いいたします。

同封しました所定の振り込み用紙に、必要事項をご記入の上、お振り込みいただければ幸いです。

記

1. 神戸大学卒業・修了30年を経過した方
 - ① 1989年（平成元年）3月の卒業生・修了生
 - ② 1989年（平成元年）3月以前の卒業生のうち、現在までに納入のない方
 - ③ **1口1,000円できるだけ5口以上**
（原則1回）
2. 各師範学校卒業生のうち現在まで納入のない方
1口1,000円 何口でも結構です（原則1回）
3. 原則1回にこだわらず、協力してくださる方
任意の金額でお願いいたします

※規約細則23条；平成4年度評議員会議決による

学部支援基金ご協力のお願い

平成16年より神戸大学院人間発達環境学研究科並びに神戸大学発達科学部の支援を目的として「神戸大学発達科学部並びに大学院総合人間科学研究科（発達系）支援基金」を設立し、これまで多くのご協力をいただけてきました。

発達科学部は国際文化学部と発展的統合し「国際人間科学部」として再出発し五年目を迎えます。地域文化・地域教育の発展充実に寄与してきた歴史と伝統が国際的視野のもとで堅持され、さらなる発展が期待される新生学部へ事業を継続していくためには、会員の皆様的心からなるご支援をお願いするしかありません。

母校のさらなる発展を期するために、会員一人一人が積極的にご協力いただくことで、成果があげら

れるようにと願っています。長期にわたる継続的な支援となりますので、意を汲んでいただきご協力をよろしくお願いいたします。

記

応募基金	正会員	1口	10,000円
	準会員	1口	5,000円
応募方法	所定の振込用紙 (今回も同封しております)		
郵便振替	01140-0-84600 (学部支援金と明示してください)		

会員寄贈図書一覧

1996（平成8）年の「あなたの著書を大学図書館に寄贈を」との呼びかけ以来、329冊もの編著書が寄せられています。

ここでは「会誌1号」以降にご寄贈いただいた図書8冊をご紹介します。これらの編著書は国際人間科学部鶴甲第2キャンパス（元発達科学部）の人間科学図書館内専用書架にあり自由に閲覧できます。

1. ①「姫路市林田町 林田の歴史」

姫路市の北西部に位置する林田藩（建部氏一万石）の歴史を中心に通史的研究

②「姫路城下町 船場の歴史」

姫路城の西部に位置する船場地区が内町と同じ扱いで発展した課程を通史的に研究

出口 隆一（教育学部1960年卒）

2. 「スケッチ 北前船散歩」

北前船寄港地10ヶ所の旅行記・短歌

橋本 孝子（教育学部1968年卒）

3. ①江戸時代「御鹿狩おんしかり」があった！

古文書に記された江戸時代に行われていた「御鹿狩」の様子をわかりやすく絵本にしました。

②「世界のチバニアン」

千葉県の地質学ガイドブックを、新しい資料を加えながらわかりやすくビジュアルに再構成しました。

岩見 悦子（教育学部1963年卒）

作画関係制作者 羽倉 恭子 湯浅 隆 湯浅 まつ代

4. ①歯ざしり

②一けん家

「今だから言える、今だから書ける」身近な暮らしの随想集

藤本 直子（教育学部1979年卒）

5. 「名言に学ぶ！悩める教師のためのポジティブ・マインドセット」

教師の抱える悩みにヒントを先人の言葉に見出し、判りやすくアドバイス

山根 修（大学院総合人間科学研究科2017年卒）



神戸大学同窓会紫陽会 著書寄贈票

書名					年月日	年月日
内容の簡単な紹介 (2行以内で)					発行年月日	年月日
出版社名	頁数	頁	型	A 5判・B 6判・()		
定価						
著者氏名						
住所						
電話番号					F	- -
E-mail						
卒業・修了年次	大正	昭和	平成	令和	年	月
卒業・修了学部・学科						

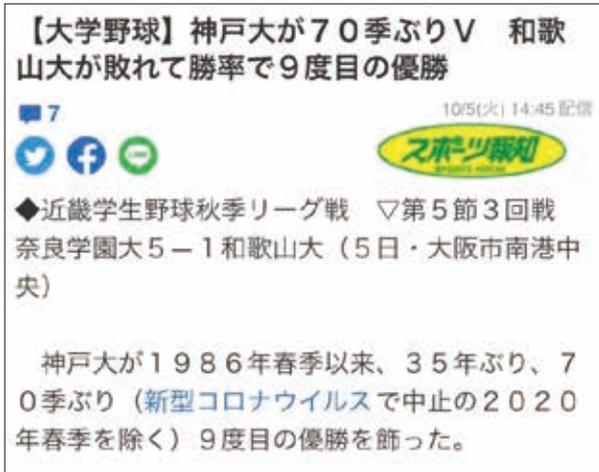
※ 著者以外の方が寄贈者の場合は次にもご記入ください。

寄贈者氏名	〒	-	-
住所	〒	-	-

※ この票をそのままご使用くださるか、B 5 版でコピーをしてご使用してください。

あじさいの小径（編集後記）

10月5日、我が家の財政を揺るがすビッグニュースが飛び込んできた。



高校3年生の夏、甲子園大会に向けた兵庫県予選3回戦、神戸市民球場で龍野高校に敗れ私の高校野球は終わった。小学生の頃から甲子園に出ることを目標に野球を続けてきた私は次の目標を「神戸大学野球部を関西六大学に復帰させること」に設定した。1年間の予備校生活の後、神戸大学になんとか合格し野球部に入部した。

当時、関西の大学野球は頂点に関西六大学（以下関六）、下部リーグとして近畿リーグ、阪神リーグ、京滋リーグがありそれぞれのリーグに1部リーグから3部リーグがあった。大学選手権に出場できるのは関六の優勝チームだけだった。リーグ戦は春と秋に行われ近畿、阪神、京滋の1部の優勝チーム3チームが代表決定戦を行い代表になったチームが六大学の最下位チームと入れ替え戦を行うというシステムだった。関六に復帰するには近畿リーグの1部で優勝し、代表決定戦で勝ち上がり、そして入れ替え戦で勝利しなければならないという遠い道のりだった。

私が入学する以前には代表決定戦を勝ち上がり入れ替え戦に臨んだこともあった。しかし私が在籍した4年間は私のふがいなさで1年春1部、秋1部。2年春2部、秋2部。3年春2部、秋2部。4年春2部、秋1部という成績で、関六復帰どころか1部残留を

後輩に置き土産にするのがやっとのことだった。

余談だが大学に入学した目的が野球部の関六復帰と教師になるための教員免許を取得することとどちらのウェイトが大きかったのか。真実は想像にお任せするが、学位記を見せた時、父が「5年間のグラウンド使用料やな」と笑いながら言ってくれたことには本当に感謝した（なぜか5年間）。

さて冒頭のニュースがなぜ我が家の財政を揺るがすのかという理由である。私が大学卒業後関西の大学リーグが再編され関西学生野球、関西六大学、近畿、阪神、京滋の5リーグが並立となった。全日本大学野球選手権には各リーグ春季リーグ戦優勝校が、明治神宮大会には5リーグ秋季リーグ戦の優勝チームによる代表決定戦の勝者2校が出場できることとなった。後輩たちが大学野球の聖地、神宮球場に立つのにあと3勝。出場が決まれば寄附も必要だろうし神宮球場のスタンドで応援もしたい。関東在住の同期の仲間にも会いたい。東京遠征費に充てる臨時予算編成のために我が家では財務大臣との白熱した駆け引きが展開されている。

Aさん「先生、お母さんが大学進学を考えたらどうかって言ってくれてるんです」私「そうですね、よかったですね。高校に入ってから君の成績なら指定校推薦で大学進学も夢じゃないでしょう」Aさん「高校で商業の勉強をしているので商学部か経済学部を考えています」

昨年このページで紹介したAさんは現在高校2年生となった。Aさんは高校入学後、定期テスト前になると社会科のテスト勉強をするために放課後私の勤務先にやってくる。国・数・英の3教科以外は中学生の時に全く勉強していなかったからだ。2学期の中間考査に向けた勉強をしに来たある日、前述の話を彼女から聞いた。空白だった中学校の3年間を取り戻すかのように懸命に高校生活を送っている彼女に大学進学の道が開けた。久しぶりに味わった教師冥利に尽きる瞬間だった。

国際人間科学部同窓会誌「紫陽会」第2号いかがでしたでしょうか。皆様のご意見・ご投稿などお待ちしております。 編集担当 副会長 笹 信隆

皆様の投稿をお待ちしています。

地区・支部・教科回生コースの動向や会合について
随想・意見・論評・歴史地誌・趣味等々について

問い合わせ・宛先

〒650-0011 神戸市中央区下山手通6-2-19
神戸大学同窓会紫陽会事務局 会誌編集担当
電話078-371-6322 FAX 078-371-6306
Email kobe-ajisai@shiyohkai.com